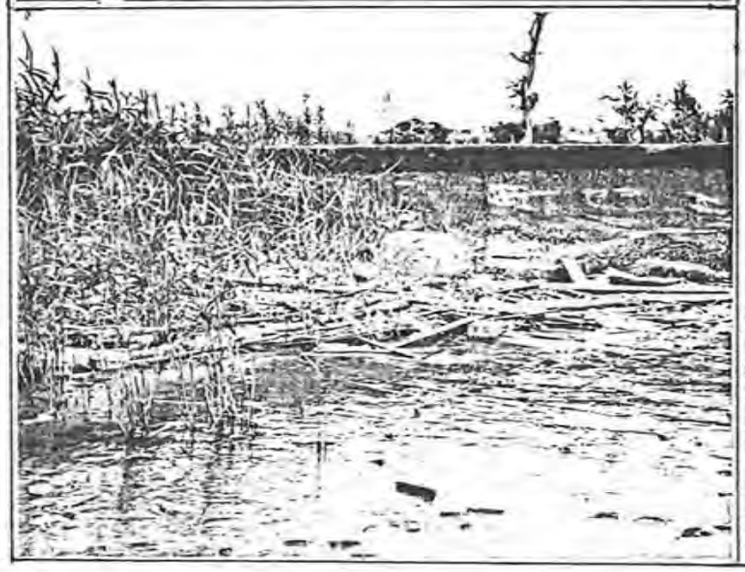
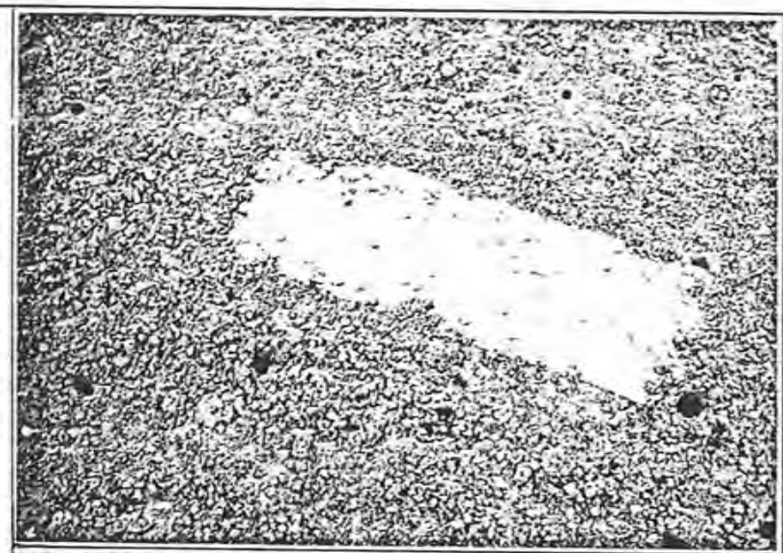
みんなぁ、待ってな、今助けに行くよー

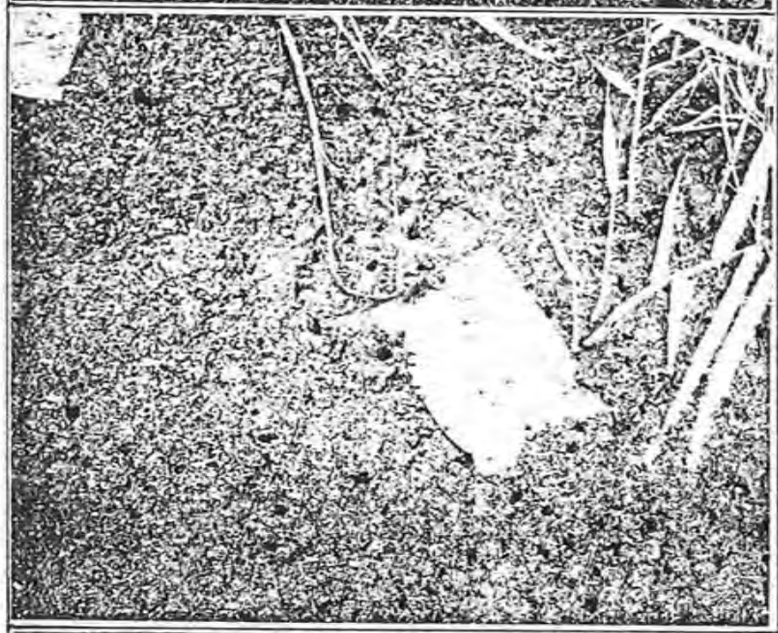


我担わん
負いし来りし〝ふかんど〟の
痛みと重荷を想いなば
彼我の境をなかるべし

この写真のゴミの下に、何倍そのゴミがある。六年程前、少し手掛けてその後の具合を見ていた。でも、その頃は、全く余裕がなかった。他の所でほんとにもう、全力を打ち込んでしまっていた。

旧遊園の建築廃材です。





ふかんど

オ341号

1985.7.2

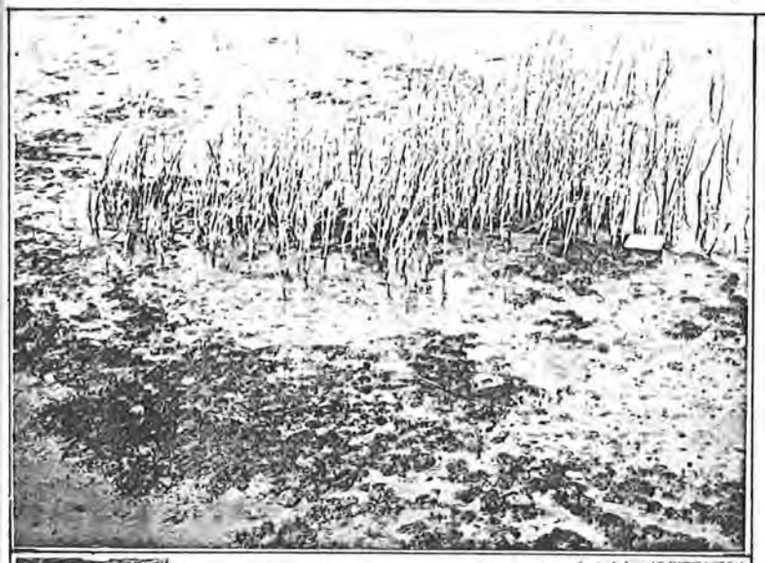
谷津干潟愛護研究会
〒275 習志野市谷津三七七 鶴荘E号
電話〇四七四－51－五〇四四
文責 森田三郎

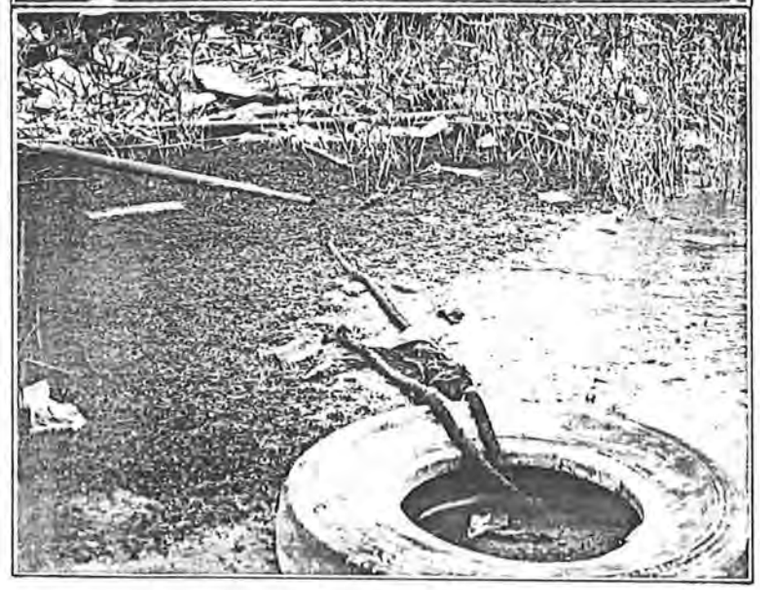
会費年2000

創立
1974.12.9

事務局047 4・51・7076 中村容子

"有能の前に、神々は汗をおいた"





ゴミの入った土のう袋や大きなゴミを、次々と堤防の上にのせる。

勿論、私は有能ではない。"だから、どうしたというのだ"。お前が、「ふかんど」だったら、何をして欲しいか。それを想い、捜し、後姿で、背骨で応えろ。全人的なる、お前自身が、その答であることを識れ。

剣が短かくて、用を足さないと言うのか。ならば、一歩踏み込んでゆけ。魔法の指で作られた馬車や靴よりも、作り出す"指そのもの"が欲しいのだ。

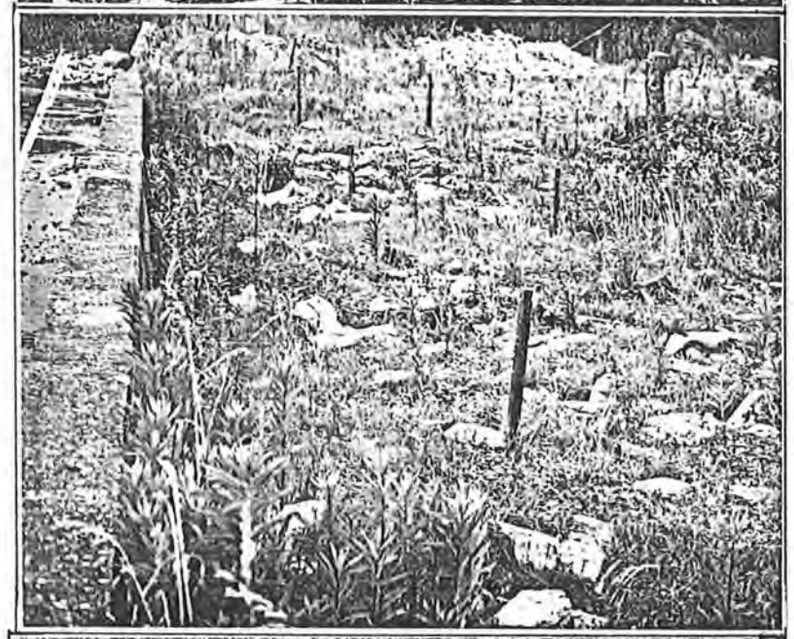
カニが棲み始めるとこうなる。今まで鏡の面の如く真っ平らだった。

更に回りのゴミを拾った。カニの数とその棲む範囲が拡大・前進する。

左斜め半分の上に、がっちりと棲んでいる。右側と比べれば、一目で分るのである。

集めるのは後でよいのだ。まずは掘ったり拾ったりの連続である。

流れて来たゴミだけなら、私は幸せだ。これから建築廃材との格闘が始まるのだ。



軽いゴミは主婦の方々の応援を頂く。

或る日の主婦たちのクリーン作戦 5/21

ふかんど

第342号

1985.7.7

谷津干潟愛護研究会
〒275 習志野市谷津三七七 鵬荘E号
電話〇四七四－51－五〇四四
文責 森田三郎

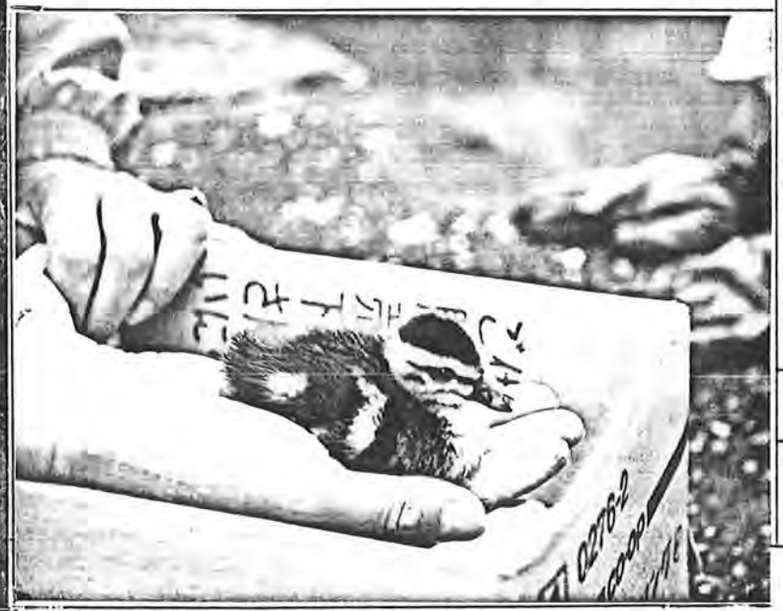
会費年2000

創立 1974.12.9

事務局 0474・51・7076 中村容子

いつもの所、ゴミが少なくて、今日は旧庭園の前の干潟を。そんで、ちょっとつまみ喰いのつもりでバラの観賞。

ちょうどこの日、私達のところに迷子のカルガモのヒナが届けられた。終ってから皆んなで、手にとった。



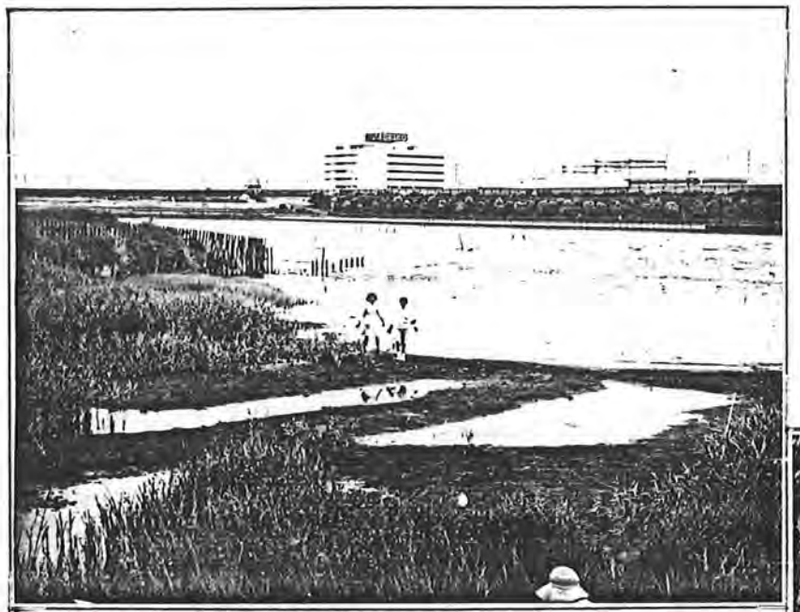
気軽に、少し位でも と――

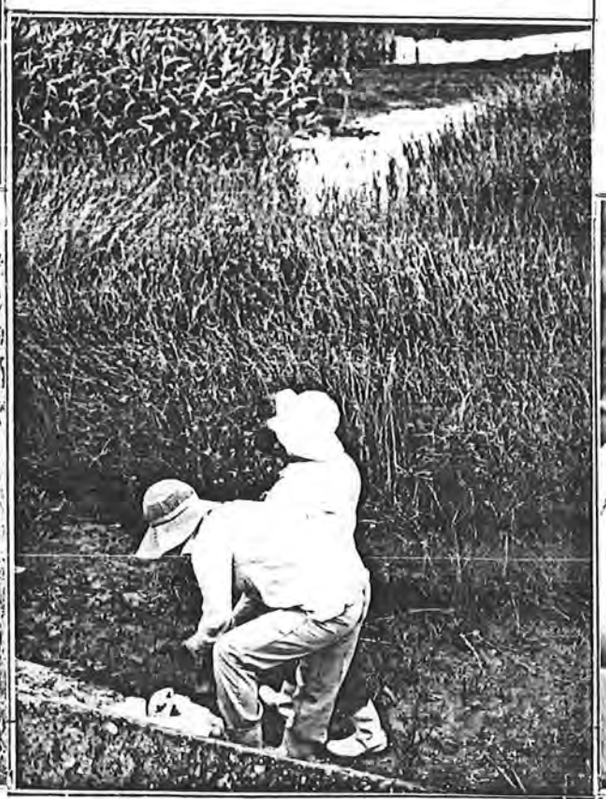
そう、主婦の方々は、きっとそういうふうな気持でコツコツとやっていると思う。

ひと月に一回の、そしてそれが、生活のリズムの中の一つ、あるいは一つの節目みたいなものになっているのでしょうか。

そうあって欲しいと思う。間違っていたらごめんなさい。

クリーン作戦は、ハードな野武士の如き狼と、ちょっと気軽にという主婦との、いわば二人三脚、カクテルみたいなもの。





コアジサシと共に（9）

植物の〝先兵〟

サンドパイプから吐き出された土砂が乾いてくると、貝がラと砂のみの砂漠のような所が出来る。

しかし、2年目になると、特に周辺部に、小さな、それをほんとにわずかではあるが、草が生えてくる。

風で飛んでくるのか、あるいは鳥の脚に着いて運ばれてくるのかだろうと思う。初めは、塩っ気に強い植物が出てくる。そしてそれらは一様に背が低い種類である。やがて、草原状となり、又、内陸性のものがどんく勢いを増してその範囲を拡大してゆく。

渡り鳥の繁殖、あるいは生息から見ると、初めはコアジサシ・シロチドリ・コチドリが何千と営巣する。次に、ヒバリやセッカ。更に背の高い植物が茂ってくると、オオヨシキリ、カルガモ、ヨシゴイ、バンなどが巣を作る。数は少ないが水辺のガマなどがある所には、かつてセイタカシギも卵を産んだ。

コロニーの寿命は、せいぜい3〜4年であろう。

オオヨシキリとモズの巣

オオヨシキリ

「谷津干潟クリーン作戦モデル地区」の、私産が作ったヨシ野の中にある。人の声が間近に聞える。クリーン作戦の主婦産、皆んな初めて見たとのこと。

ここは、習志野市の「海浜霊園」の植え込みの木の中。ちょうど人間の目の高さの所に営巣していた。50メートル先は、波が打ち寄せているのです。

これから、木々の茂るにつれて、もっといろんな鳥が巣を作ると思いますよ。

モズ

わぁー、ふっかふか のジューターンみたい！

ふかんど

第343号

1985.7.15

子供が、歩いたら そお言うのでした

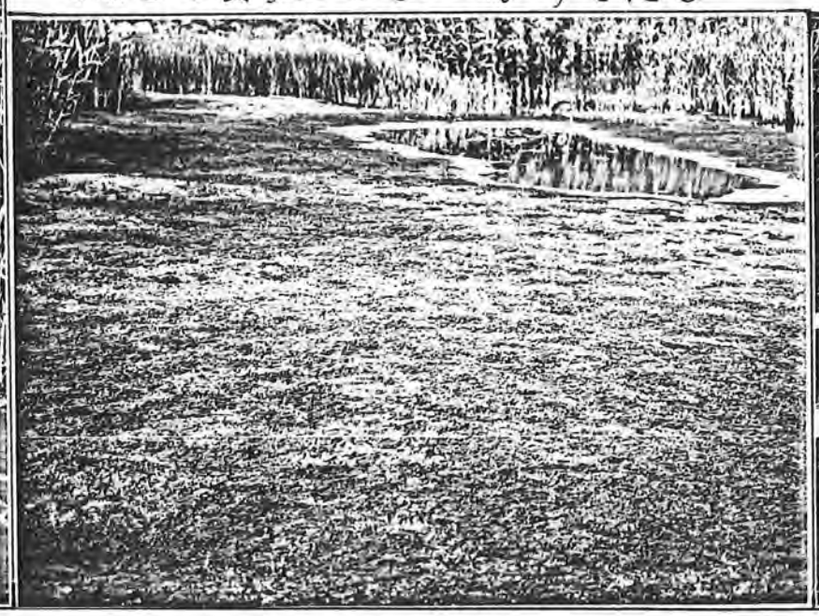
それはここが、体操がニの穴と砂ダンゴの為にそんなふうになるのである。〝ふかふかっ〟、あるいは〝サクサクッ〟っていうのか、とにかく歩いてみるとそんな足の裏の感じだし、又そういう音がするのである。

クリーン作戦モデル地区のここは、全部がカニの穴だらけで、砂ダンゴがすき間ない程ぴったりくっついていて、文字通り〝ふっかふか〟である。

今、体操がニ、つまりチゴガニとコメツキガニが大繁昌のまっ最中。皆さんも是非一度歩いてみて下さい。

想い出すのは、六、七年前。ここがまだゴミだらけでドロくの頃。カニなどはいなくって臭かった時。私がバケツを持ってドロの中をウロウロく歩いては石やガラス、毛布や鉄骨を拾っていたのだ。そしたら、堤防の上からそんな私を見ていた子供が言ったっけ、「ほらあ、あのオジサンねえ、〝宝探し〟やってんだよーーー」と。二人の子供が私を指差しながらそう言った。――「坊や、ほんとうにオジサンは、宝を捜したよ」。

現在私達がクリーン作戦を展開している、旧谷津遊園地前を、やがてはこのようにしていく。すでにもう、少しずつそうなってきている。谷津三丁目前、干潟の南岸と、今3番目である。どうかお楽しみに！



谷津干潟愛護研究会
〒275 習志野市谷津三-七七 鵬荘E号
電話〇四七四-51-五〇四四
文責 森田三郎

会費年2000

創立 1974.12.9

事務局0474・51・7076 中村容子

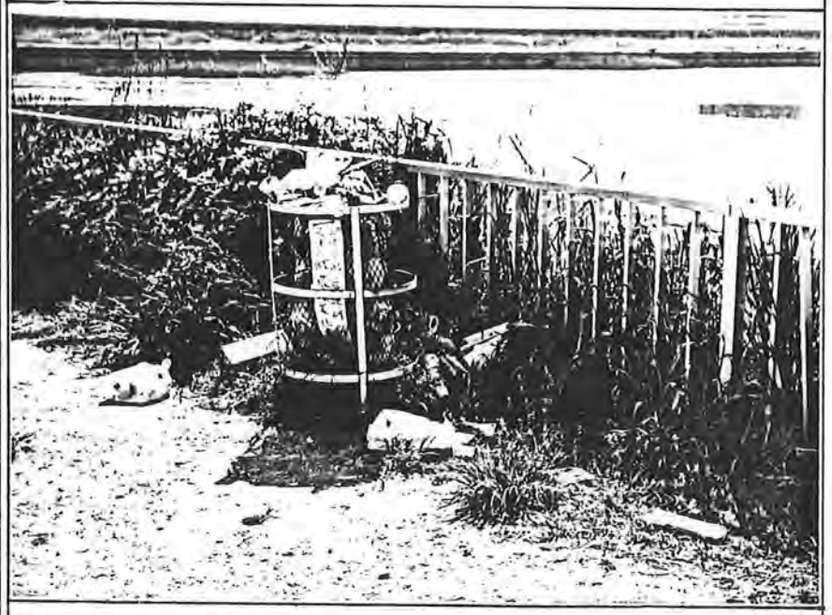
コアジサシと共に（10）

なぁーに、入らなくたって

ちょっと手を抜くと、こんなことしょっちゅう

よくまあ出ますねぇ、置いていきますねぇ。週に2、3回ゴミを袋につめて持っていってるんですが。

津田高側に3ケ所設置してあるが、この冬真程度だったらまだ上の部。辺り一面、ゴミだらけの時と。でと、ゴミが多いっていうのと、干潟に人がたくさん来ている証拠だからね－－－－。



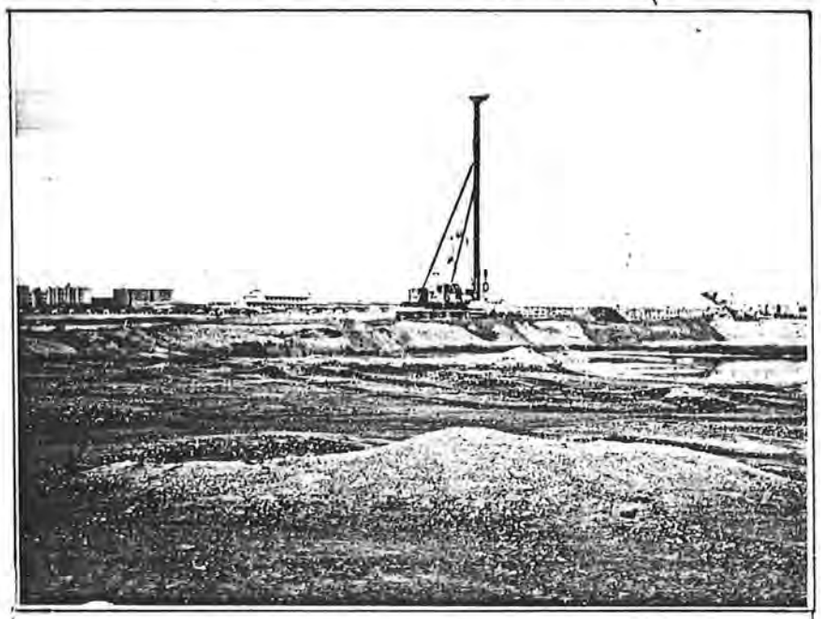
ゴミは持ち帰ろうなんてったってダメ。
今しばらくは、これでしょうがないかねぇ。

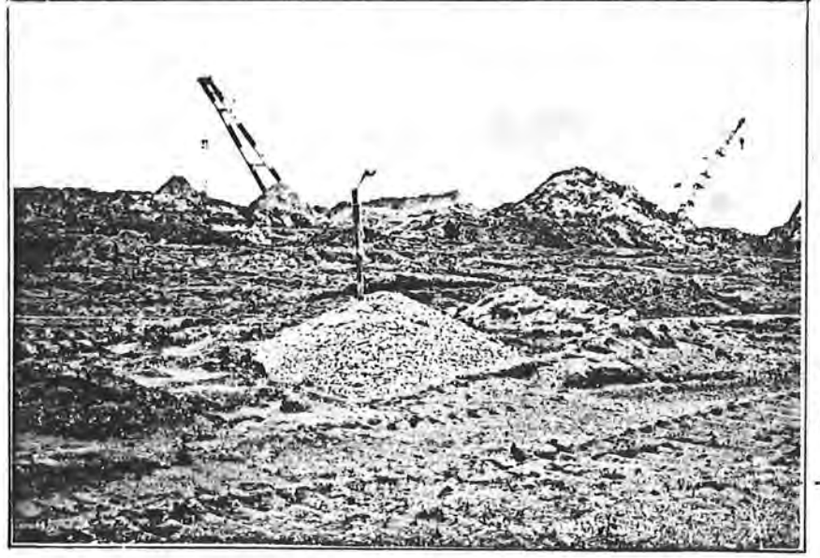
消えゆく貝殻山

貝殻山とは、広い埋め立て地のあちこちに、点々としていた、少しゆるやかに小高い所である。

なぜ小高いかというと、まだサンドパイプが海水と土砂を吸み上げている時。すなわち造成している時に、サンドパイプが所々で口を開けられ、吐き出されていた所だからである。

真ん中がくぼんで、丁度すり鉢形になり、直径は、小は10メートルから大は40、50メートル程である。ここは又、他の平面に比べてひときわ貝殻が多いのである。高いので水はけを良く、乾燥している。





この貝殻山こそ、コアジサシ達が最も好んで営巣する所であった。巣の分布を、ここに圧倒的に集中していた。一つの山に、あるいは丘に、一シーズン100以上もの巣が数えられたのが幾つもあった。

私の知る限り、今の海浜緑園（芝園）、ホンダ埠頭、スバル埠頭（共に茜浜）は300巣を確認され、全国最大規模であった。

旧谷津遊園前の干潟に「アマモ」が発生

ふかんど

第344号

1985.7.23

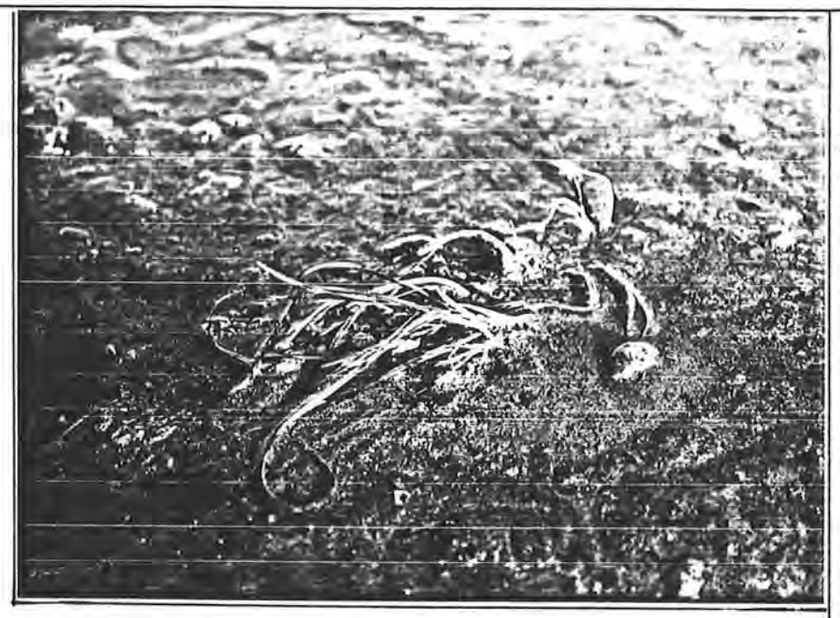
谷津干潟愛護研究会
〒275 習志野市谷津三-七七 鵬荘E号
電話〇四七四-51-五〇四四

文責 森田三郎

事務局 0474.51.7076 中村容子

会費年2000

創立 1974.12.9



長さ15～20cmの、小さなもの。温かくその生長を見守っていきます。

7月13日、2ヶ所発見。更に、7月20日1ヶ所発見。

午後3時頃。疲れたので、休みのつもりで歩いていた。さんざんコンクリートや石、ガラスやビニールを地中から引っ張り出していたので、指先や手首が痛くなっていたのである。そんくらい、ここのゴミは多いのである。

シャベルを持ち、陸側のチゴガニ(砂質)と、干潟側のヤマトオサガニ(泥質)の生息範囲の状況を見比べていた。

その中間地帯に目をやると、緑色のものがあった。流れ着いた海草かゴミかと思った。でも、又、「ひょっとしたら・・・」とも思った。期待半ばに数歩近ずき、しゃがんで手で確認した。間違いなかった。アマモでも、「コアマモ」である。

谷津干潟に、初めて藻が発生したのは今から2年前(83年10月4日)。海寄りで、水路に近い所。丁度旧遊園の対岸である。

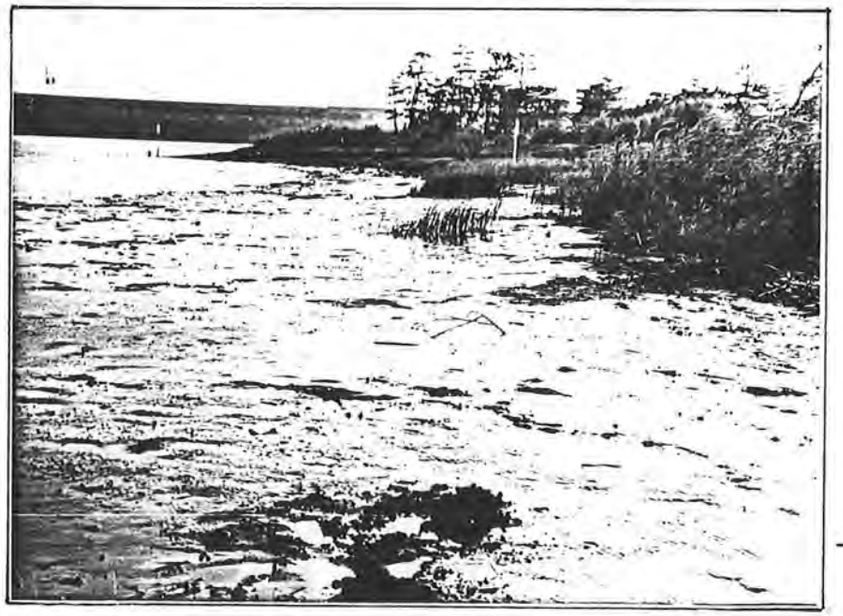
今回確認された所は、前回と正反対に位置し、水路、そして最も干潟で奥まった所。かつ清掃して来た所だけに喜びもひとしおのものがある。

藻は、保水能力があり、カニや魚が卵を産みつける所。又、その発生は泥や砂が安定してきた証拠でもある。

かつて、谷津干潟が「ふかんど」と呼ばれていた頃には"藻場"があった。しかし、周囲の埋め立てと共に、20数年前に消滅してしまった。

この藻の発生は、クリーン作戦にとって、大きな慰めとその力の根源である。

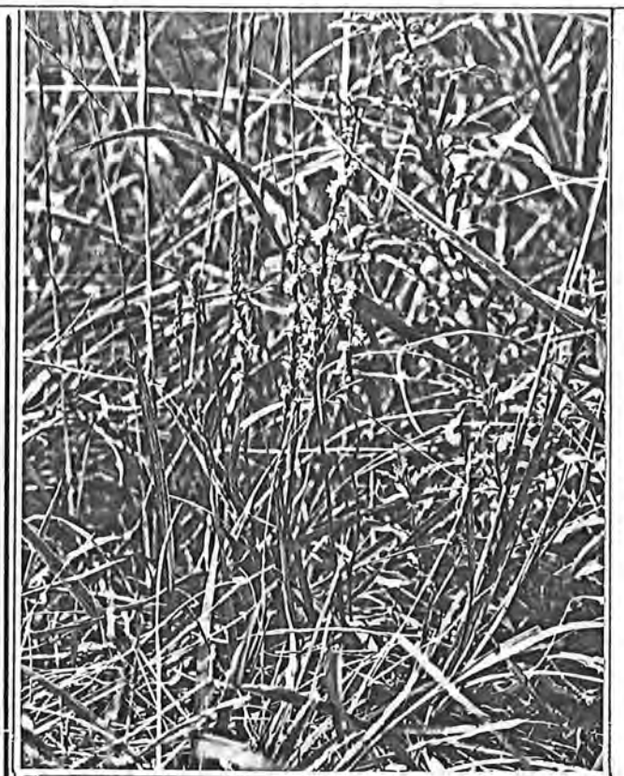
会報NO.341を参照。かなりきれいになったでしょう。でも、まだまだまだ・・・。



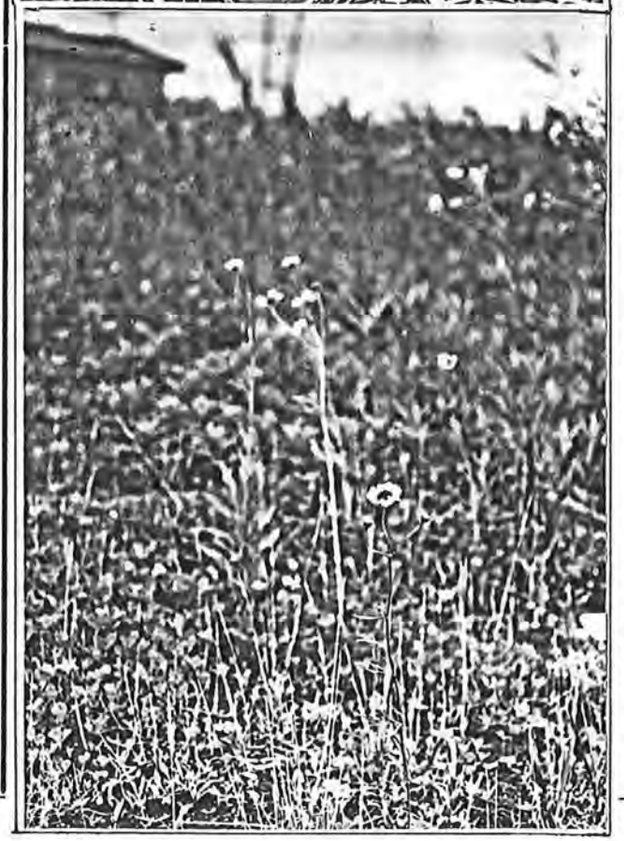
災天下でも、強力に展開されております。

多数のゴミ袋が使用されています。袋の為のカンパをお願いします。

コアジサシと共に（10）～夏の自然緑地で



ネジバナ、あるいは「もじずり」の花。メダカの池やテーブルやベンチのまわりの草むらで、そのすごくたくさん咲いていた。毎日の如く花を摘む人が。

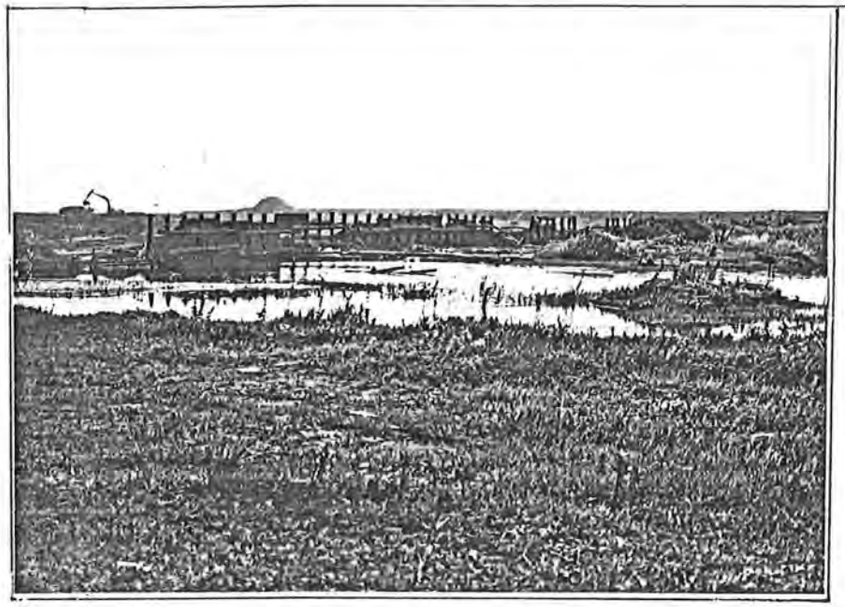


キバナコスモス。緑の草原の中に、風にゆらゆれている。黄色なのですぐ目につく。あっちにポツン、こっちにポツンと少しずつ咲いている。

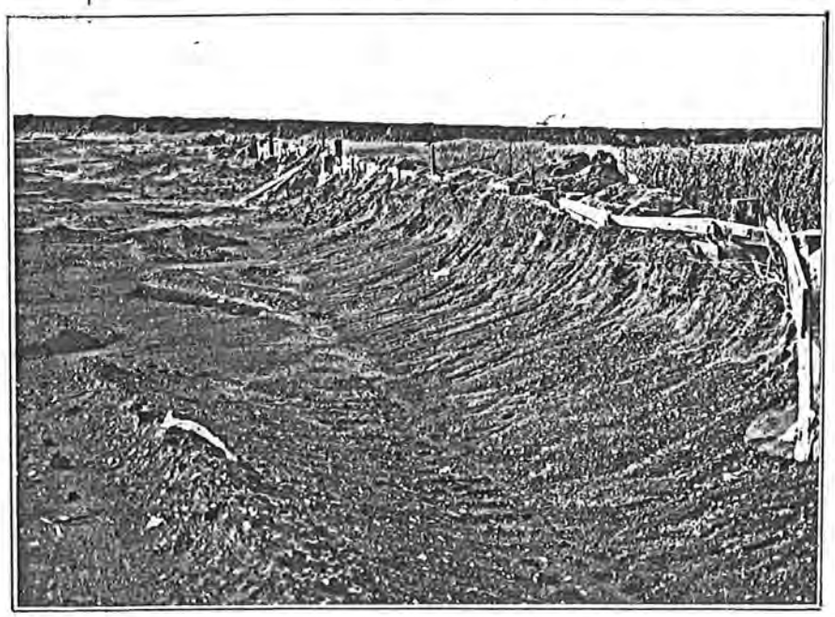
埋め立て地然として

板と杭からなる、土止めの為の大きな囲いである。数百メートル四方のもので、埋め立て工事をする時は、海中に作られたこの囲いの中に、海水と共に吸み上げられ、サンドパイプで送られてきた海底の土砂が吐き出された所である。

囲いの周りには、ぐるりとパイプが走り、中にも"田"の子のようにパイプが置かれるのである。そして、あっちで切っては土砂を吐き出し、それが積っては除々に高くなる。今度は別の所でという具合に、次々と囲いの中で行なった。



今はもう、こういう光景は殆んど見られなくなってしまった。杭は松なので案外強いが、板はすでに腐っていてボロボロ。所々に、赤く錆びたかすがいを見られ、当時を偲ばせる。



私がやると子供も真似てね　「ここはね、私の縄張りなんですよ・・・」

ふかんど

第345号
1985.7.26

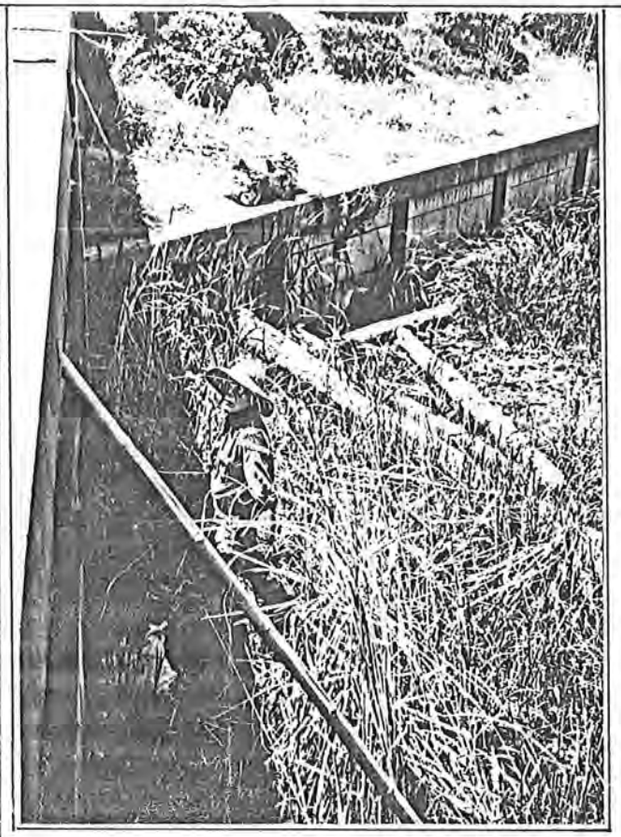
谷津干潟愛護研究会
〒275 習志野市谷津三七七 鵬荘E号
電話〇四七四－51－五〇四四
文責　森田三郎

会費年2000
創立 1974.12.9

事務局0474・51・7076 中村容子

そう言って、いつもコツコツと拾りでゴミ拾いをしている山口昭三さん。場所は、緑地と湾岸道路が接する所です。ここは又、最もゴミがたまりやすいのです。

この人、ほんとにマイペース。でも、実によく来られる。雨の日にはカッパを着てやっているのです。遠くの方から、「今日も来ているのかなぁ」と思って見ると、ポツンと一人、ムギワラ帽子姿の山口さんが。



ヨシヤゴミで目をつつつかないよう、いつも防水メガネをかけている。山口さん、決して無理をなさらないでね。

ここは、マープルスカイハイツのすぐ前です。護岸が斜めなので、ここでのゴミ拾いはロープを伝って登り降りして行なっている。

子供が寄って来ては、そんな格好の私を不思議そうな目で見る。やがて、こわごわと、「おじさん、これ使っていい」なんて聞くのである。一人がやり出すとみんながやる。「いいか、その代りおじさんといっしょにゴミ拾ってくれよぉ」と言うと、小さな手で拾ってくれるんです。

工事中の旧遊園地の中で

イソシギの幼鳥を確認

7月13日。いつものように旧遊園の中を通って干潟の清掃に行く時見つけた。

草が少ない、土と砂地がまわりにある水たまりの所でです。やっと飛べるばかりの状態でした。巣は見つけられませんでしたが、ここで繁殖したことはまず間違いないでしょう。

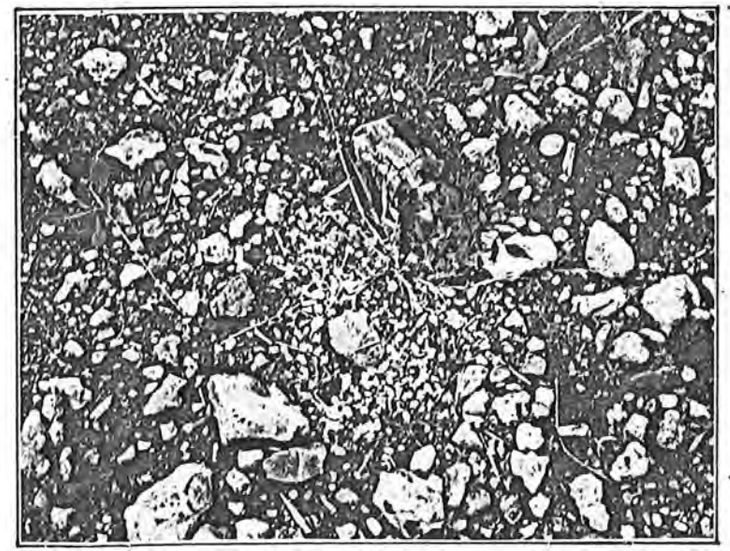
5月中旬より、3つがい程よく姿が見られました。

カルガモのヒナが誕生しました

工事現場のすぐ近くで巣を作り、無事誕生したとのこと、7月の中旬、作業員の方から聞きました。

20〜30羽のカルガモが干潟と草地を出入りしていた。営巣することがわかっていたので、私達と注意していきました。

今、それらしい親子連れが毎日干潟に出ています。



コチドリの巣

やっぱりやりました。

水たまりのすぐ近くの、石と砂地の、少し小高い所です。とってもきれいな声で鳴いています。

干潟の内と外では

ヒバリの巣

ポンプ場のすぐわきの所です。残土や砂利、捨てられた工事用の鉄板などがまわりに落ちている。

隣りは又、子供達の野球広場がある。踏みつぶされなければいいのになぁー。

ひとりぼっちのアヒル

マープルスカイハイツの横で、工事用の橋が作られている最中。その工事中の橋の下にすみついてしまった。頭上ではガンガンと車やクレーンの音、そしてバチくと火花を出す熔接。他の3羽になじまず、夜中に見に行っても、ぽつんとしている。

谷津干潟クリーン作戦に〝二つの新たな武器〟

ふかんど
オ346号
1985.8.1
谷津干潟愛護研究会
〒275 習志野市谷津三七 鵬荘E号
電話〇四七四-51-五〇四四
文責 森田三郎
会費年2000
創立 1974.12.9
事務局0474・51・7076 中村容子

サーフボードを贈らる

干潟のすぐそばに住んでいる池田恭男さん(袖ヶ浦二丁目)から、「子供が使わなくなったので、どしよかったらーー、いつも見ていましたよ」と言って、サーフボードを贈って頂きました。

7月13日、夕方近く、森田が津高がわでコンクリートや鉄パイプなどを、引き上げていた時、散歩に来ていた池田さんが話しかけてこられました。

池田さんは、毎日犬を連れて干潟の周りを散歩に来るとのこと。昔、自宅の前が遠浅の海だった頃、よく貝とりに行ったそうです。

私達が潟スキーでゴミを拾いながら、干潟の上を滑っているところをよく見て知っていたとのことです。

今使用中の潟スキーは、コンクリートや杭、鉄骨などによく乗り上げたことがあるので、かなり傷だらけです。今年中にはボロくになるでしょう。

池田さん、本当にどうもありがとうございます。

ボートを頂きました

潟スキーとボートを組み合わせ、田船方式でクリーン作戦をする考えです。

長さ6メートル、プラスチック製です。いたずらされない為に、今は一般の人が立ち入り出来ない旧遊園地の前にけい留してあります。

市を通じて頂きました。そして、トラックで干潟の中にまで運んでくれたので大変助かりました。更に、住宅・都市整備公団が〝船付き場〟みたいな、護岸から降りて船に乗る小さな桟橋を作ってくれるとのことです。

クリーン作戦を、ボートの使用によって展開するのは初めてです。「ボートがあればなあーーー」位には思ったことはありますが、本格的、具体的に考えたことはありませんでした。

ボートの参入により、クリーン作戦は新たな方面へ進んでいくでしょう。

船によるクリーン作戦は初めてです。

「干潟に捨てちゃうからねっ！」

あれまあ、ーーんだなあ

そんなふうに、お母さんが子供に叱っている声が、すぐ前の家の中から聞えてくるのです。

お昼下がりの炎天下。汗と泥まみれの体を洗おうして、毎度の如くアパートの庭先の水道でまっ裸になっていた。

「お前っ、何回母ちゃんが言ったらわかるんだよお。んったくまあねえ。ちゃんとサンダルぬいだら、きちんと片ずけなってあれほど言ってんのにい、しようがないねえ。今度やったら、いいかい母ちゃん干潟に捨てて来ちゃうんだからねっ」。

今は子供達は夏休み。何回言っても、何回揃えても、子供は中々そうしてくれないんでしょうねえーー。

しかしまあなんですねえ、これも干潟を取りまく、その現実の一つなんですね。お母さんの気持ちも分るし、子供のことも分るし、それに、自分の子供時代、おふくろのことなどーー。

聞きながら、あるおかしみ、苦笑いがこみ上げてきてしまった午後でした。

ウミネコの餌付けに成功

こわい目をしてゆう然と

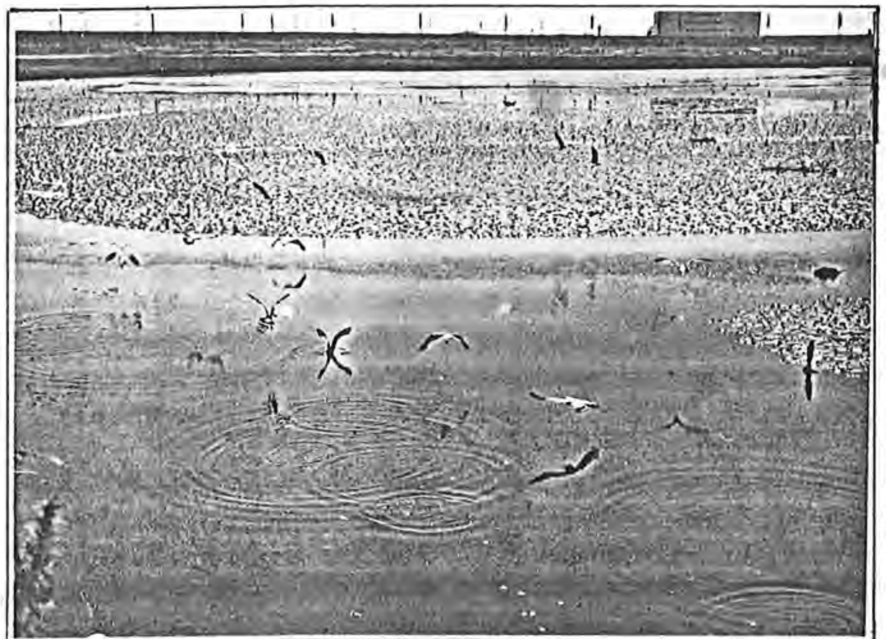
ウミネコは、代表的な夏の鳥です。毎日100〜200羽程来ている。体が大きいのでひと目でわかります。

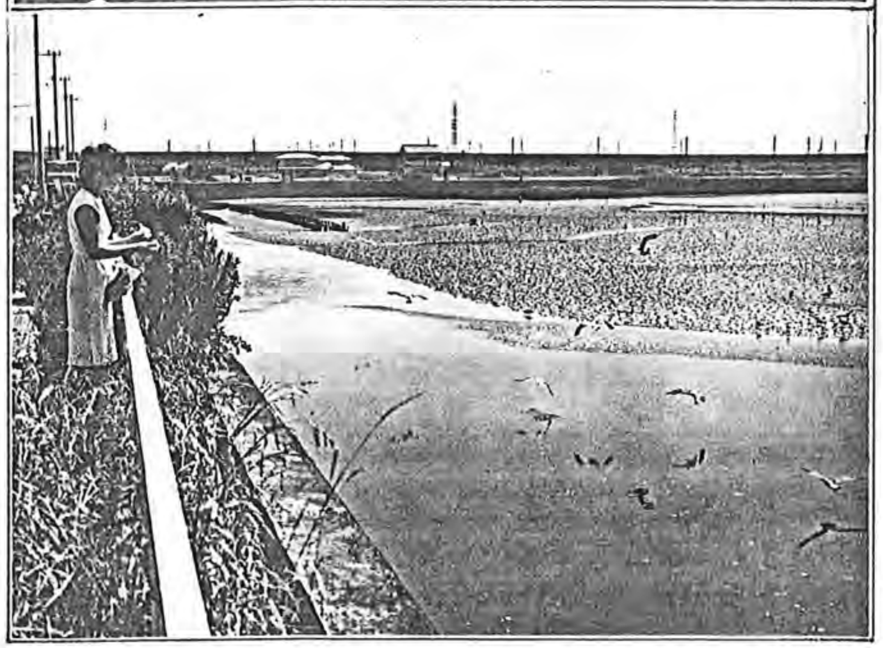
去年の夏からやっていますが、まだ少し用心しているようです。

冬のユリカモメよりも、ひと回りもふた回りも大きな図う体なのでゆったりとしたものです。案外どう猛でかわい気のない鳥ですが、なれれば人なつっこいところがあります。

パンのミミをひとしきり食べ終ると、〝ミョオーー〳〵〃と口を空に向け、鳴くのです。

危害さえ加えなければ、みんなの協力で、将来はもっともっと良い触れ合いができるでしょう。





たゆとう船に想う ∮ 叱る、怒鳴る。が、憶えておこう

ふかんどし

第347号

1985.8.5

谷津干潟愛護研究会
〒275 習志野市谷津三-七-七 鵬荘E号
電話〇四七四-51-五〇四四
文責 森田三郎

会費 年2000

創立 1974.12.9

事務局 0474.51.7076 中村容子

「おぉーい、この野郎ぅ、何やってんだ、やめろぉー！」とか、「君達い、頼むから、そういうことしないでね」と。

鳥や魚、カニに石やカンを投げる。たき火をしたり花火、テーブルやベンチをこわしたり。それが日常の子供達。

投げたゴミを拾わせ、ベンチを修理さすことと。そんな時、憶い出すのです。古い、昔の本に書いてあったことを。

「年寄り叱るな 行く道じゃ
子供叱るな 来た道じゃ」

干潟では、潮の干満が主で、船と私は、従なのである。

夏雲と
たゆとう船に打つ波は
幼き頃へと
今を忘れん

船には何か、不思議な、子供の心に帰らせるものがある。〝お前はいったい何をやってきたんだ。いつまでさ迷い歩くつもりか。まだお前がわからないのか〟。そんなふうに、言ってる気がするんです。

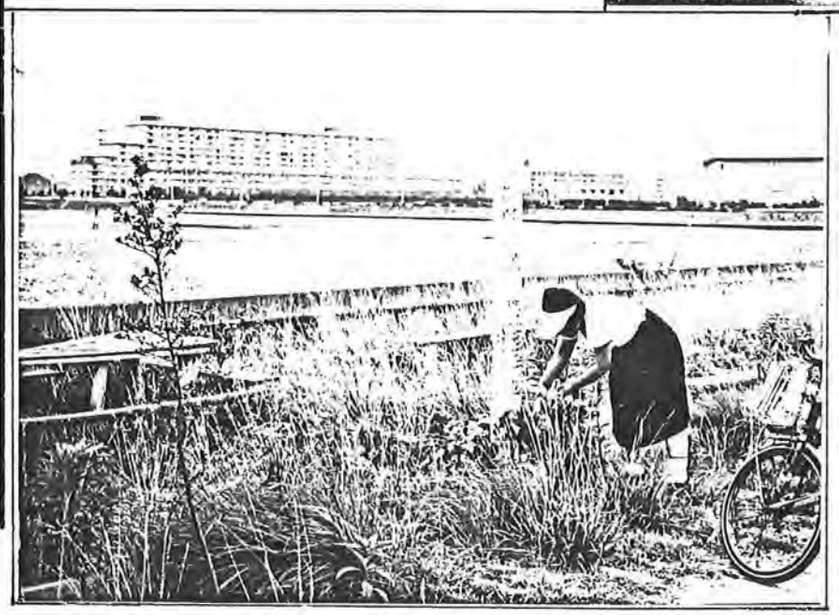
1000ccパックジュース2本飲む　ちょっと植えてみたくって

「メダカの池に、ショウブを植えようと思って――」と宮川郁子さん。

7月17日。子供が幼稚園に行っている合間に急いで来ました。ほんとうにいつもありがとう。

埋め立て地にショウブは初めて。生きていけるかしら。

潟スキーでのクリーン作戦で、「いそしぎ」で休んでいた。ふと目をやると、誰かなあ、知らない人が3種類の草と木を植えていってくれました。



炎天下でのクリーン作戦

夏のクリーン作戦には、飲み物は絶体に欠かせない。

長塚さんや山口さんは、ポットに必ずお茶を持ってくる。顔じゅう玉の汗にして、上着をびっしょりにしておいしそうにごっくん〈と飲んでいる。

森田の場合、1時間ごとに1000ccパック1本はいる。作業の合間ごとに飲まずにはいられないので、たちまち無くなってしまうのである。

飲んでから、5～10分程休む。干潟を渡ってくる風は、ほてった体に実に気持ちがいいものである。

私が今進めている旧遊園地前のクリーン作戦は、一応半年がかり、来年の5月頃をメドにしている。ゴミといっても、石やコンクリート、鉄板や建築物といった重い、かつ汚れたものである。しかも、殆んどが干潟の中に埋まれているものばかり。

子供たちといっしょに

ふかんど

第348号

1985.8.10

谷津干潟愛護研究会
〒275 習志野市谷津三-七-七 鶴荘E号
電話〇四七四-51-五〇四四
文責 森田三郎

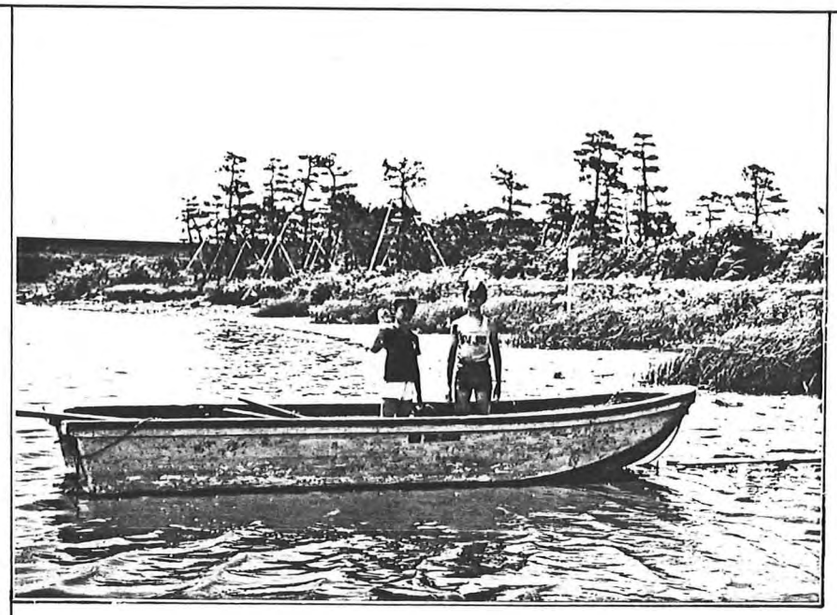
会費年2000

創立 1974.12.9

事務局0474・51・7076 中村容子

ボートで……

7/23



中村暢孝君と中村彰吾君。又連れて行ってね、とのこと。今度は働けよ。

旧遊園地前から"船出"しました。

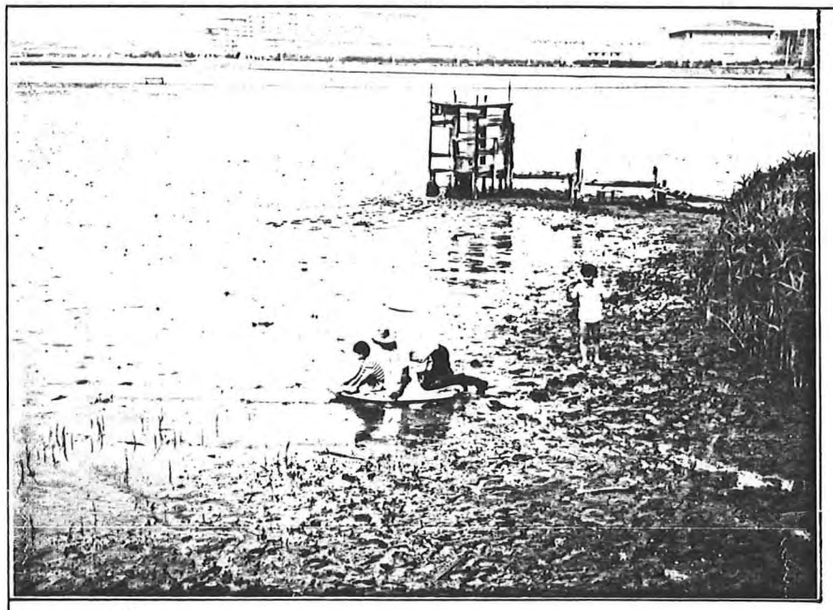
ボートを砂浜から押し出そうとしている水辺は、ビチャ〳〵と魚の群が泳ぐ音がいっぱい。又、竿を差しながら進んで行くと、船のまわりのあちこちで、魚がピョン〳〵とはねまわるのでした。

二人共、水泳教室に通っているので水は恐くないとのこと。なあーに、落ちたって浅いから溺れやしないよ。

この日は、水上観察舎前から津田高側の前をまわってきました。

潟スキーで……

6/23



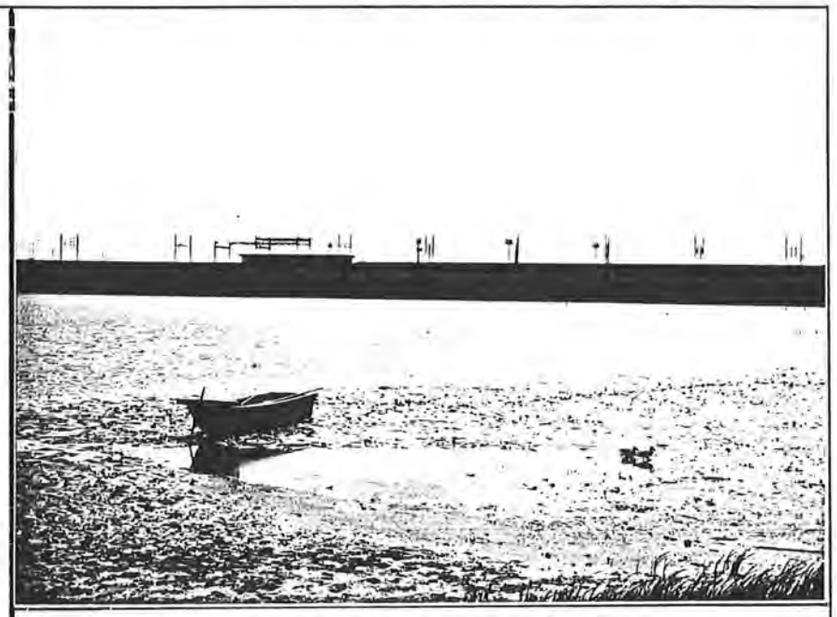
「おじさん、あっち。ほらぁ、こんどはこっち」と、ゴミがある所を案内する。

二人共、記念すべきことをしました。それは、谷津干潟で、大人を子供を含めて、初めて谷津干潟を横断・往復をしたのです。私の他は。

"エッサ〳〵"とかけ声をかけていっしょにこぎました。

写真の子供は、秋津団地の青木健太郎くんと青木誠くんです。

ややっ、何の骨だろう？〜ヨシゴイが現わる〜　そう、いいかしら---？



ゴミを拾うと、カモが穴。次の日行くと
そこにゴミが見えている。又拾うと、又カモが。

「待ってたんすよ、はい。いつものことですけど、又やらせてもらいますよ。ほんとにいすいませんねぇ---」と、このカモが私達にそう言ってるかを知れません。

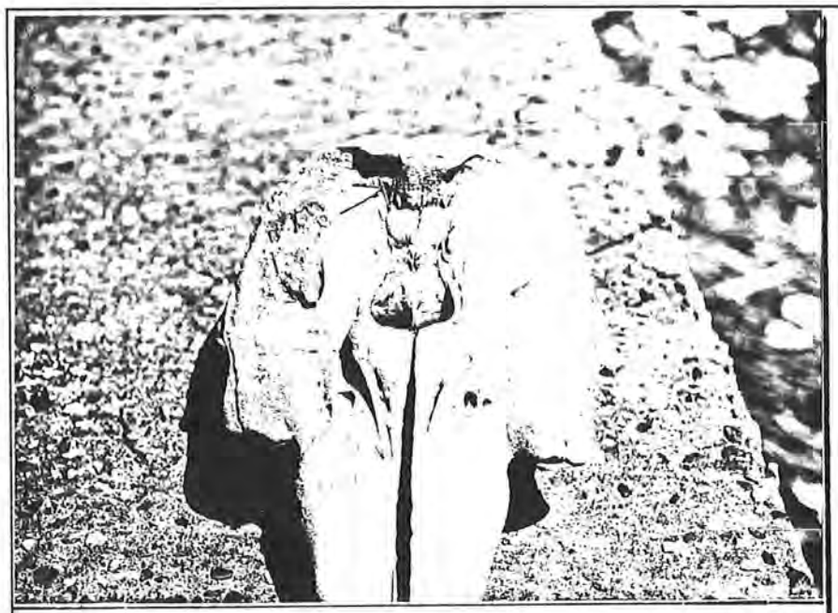
ここは、今、カを入れてクリーン作戦を展開している旧遊園前。私達が去ると、カルガモがすぐやって来て、穴を掘るようにしてはゴカイやカニ、草の根を食べているのです。

谷津干潟に初めてです

ヨシゴイが、谷津干潟に初めて姿を見せました。

7月19日(火)。ちょうどこの日は、オ130回目の主婦の為のクリーン作戦が行なわれました。場所は谷津3丁目前の干潟。主婦の人達といっしょにみんなで、その飛ぶ姿をはっきりと見ました。生息範囲は限られていて、3丁目前の、モデル地区に作られたヨシ野の外へは出ないようです。中村さんなどは至近距離で、ヨシの上の方にとまってじっとしているのを見たとのこと。

繁殖は今頃で、魚を食べ、ヨシやガマの高い所に巣を作ります。



記念にと、今持っています。この先、
クリーン作戦、何が出てくるやら---。

6月の半ば頃、旧遊園の堤防のすぐ下に、砂に埋もれるようにしてありました。すでに長い年月が過ち、波に洗われて白くなり、汚い感じはありません。おそらく、象かを知れない。だいぶ以前にでも、谷津遊園の人が死体をこの海に捨てたのかも---。

それにしても京成はひどいぜぇ。あれだけ海を利用してきて、何てまあメチャクチャにゴミを捨てて来たものか。

行けば、必ず見られますよ。

クリーン作戦は前進する

なつかしい光景です

ふかんど

第349号

1985.8.17

谷津干潟愛護研究会
〒275 習志野市谷津三ー七ー一 鶴荘E号
電話〇四七四ー五一ー五〇四四
文責 森田三郎

会費年2000

創立 1974.12.9

事務局 0474・51・7076 中村容子

あさりとり
夏の水面(みなも)に輪をひろげ

私の5軒先にお住まいの秋元さん。
この人、昔から海が好きなんですよ。

確か、あれは昭和50年だったと思う。コアジサシの繁殖調査をしていた6月。今のホンダ埠頭の所に、きれいな砂の浅瀬ー干潟があり、ノリひびをあってアサリが目に見える程たくさんいたのを知っていた私は、ある日干潟のミオに入って歩いた。

足で踏み、手で触り、干潟の具合を見ていて思いついたのだ。「これなら、アサリが棲めるかも知れない」と。それですぐ、バケツで2杯ずつ、3回に分け、50年、51年とここはまいたのであった。そしてその後、何十回も確めに行った。

アサリをまいた時の水音、きのうのことみたいだ---。

アマモ。2年前と同じ所。3年連続。まずは安定と考えよう。

7年前までは、ここは、全くのヘドロ状で、人が歩けないのは勿論、カニもゴカイもいない無生物の所だった。今頃、つまり、夏になると朱色にドロが腐り、プーンと強烈な悪臭が鼻をついたものであった。

クリーン作戦はすでに始められていて、ゴミ、特に干潟をちっ息させている板やビニールをもち上げた時など、その匂いはひときわであった。

主婦の協力を得て、徹底的にここでのゴミを拾い上げた。そして、55年の冬から半年間にわたって砂を入れ、所々に変化をつけてきた。

まず、チゴガニやコメツキガニが出始めた。干潟の中央部からはヤマトオサガニの生息範囲が岸の方へ拡大・前進してきた。次にヨシ野とイグサを増やし、作った。

ゴミを拾いつつ、アマモを見守っていこう。

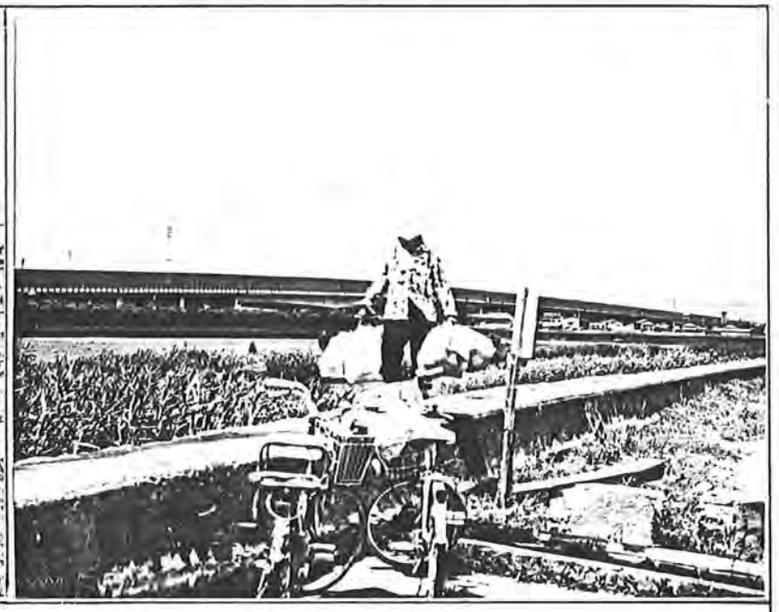
砂入れは、湾岸道路から東水路までの間。

猛暑の中でのクリーン作戦

毎月才三火曜日・主婦

冷たくておいしい麦茶を用意してきてくれた宮川さん。清掃の後、皆んなに配ってくれました。

台風でたくさんのゴミが流れてきました。重いゴミを運ぶ松枝さんと本宮さん。



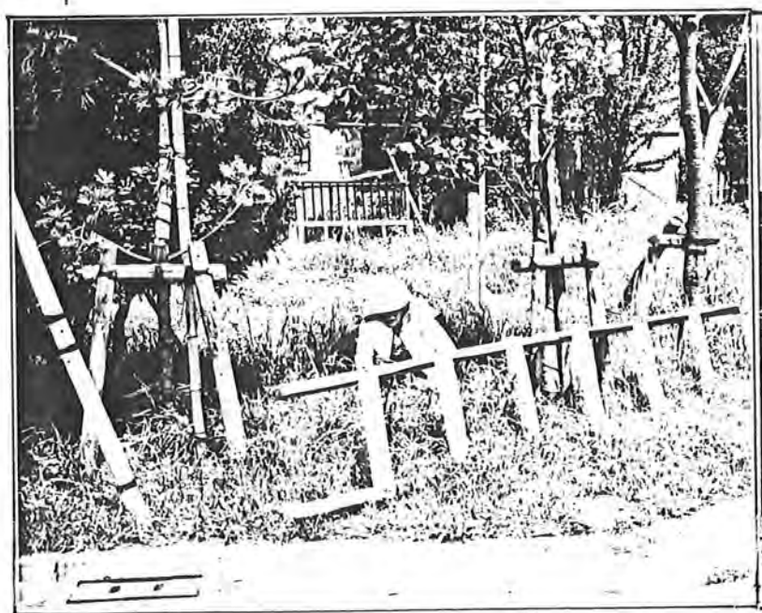
井本さん、力がありますね。大きな四つのゴミ袋を持って、エッサエッサ。

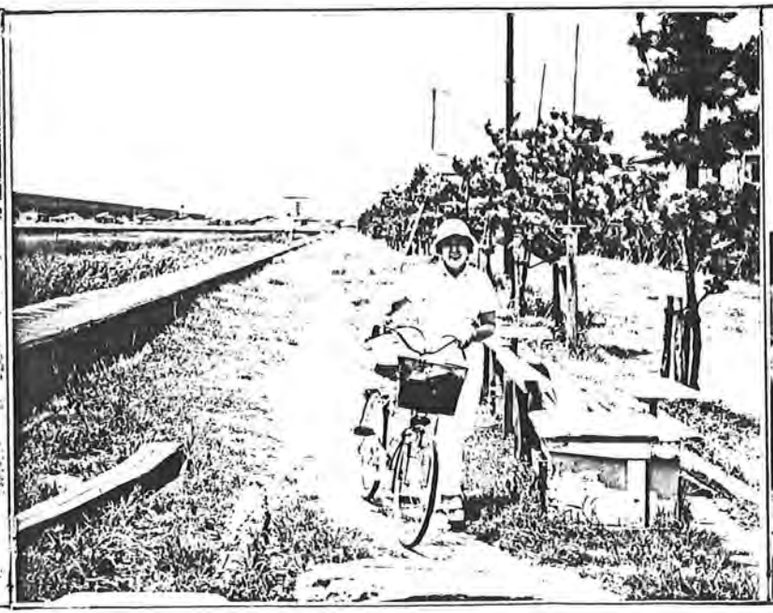
7月16日(火)

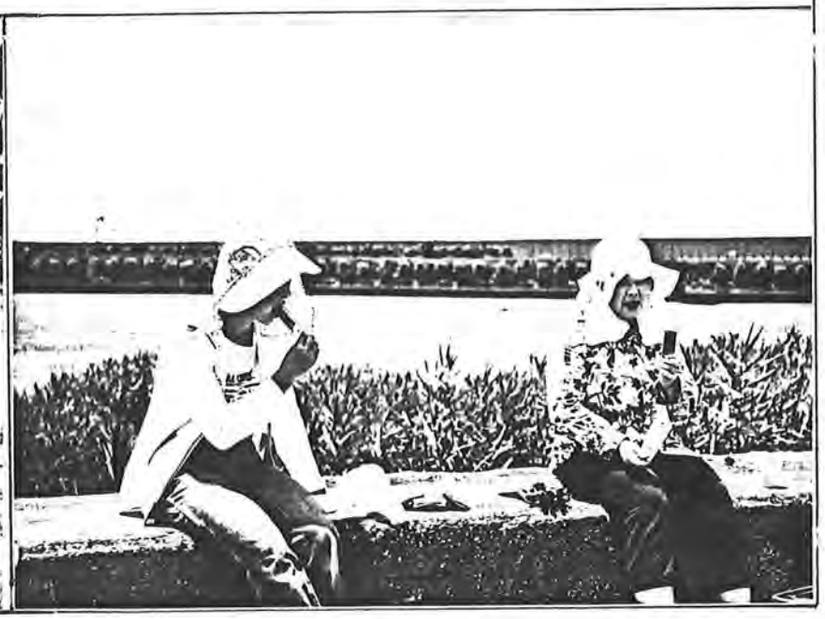
暑さでのぼせてしまい、ダウして木陰で座り込んだ中村さん。少しやり過ぎたんですね。

「遅れて申し分けありません、でもアイスを買って来ました」と種田さん。

アイスクリームをペロペロと、おいしそう。井本さん、中村さん、何を話してるの。







ふかんど

第350号

1985.8.24

谷津干潟愛護研究会
〒275 習志野市谷津二丁目七番地五号
電話〇四七四－五一－五〇四四
文責 森田三郎

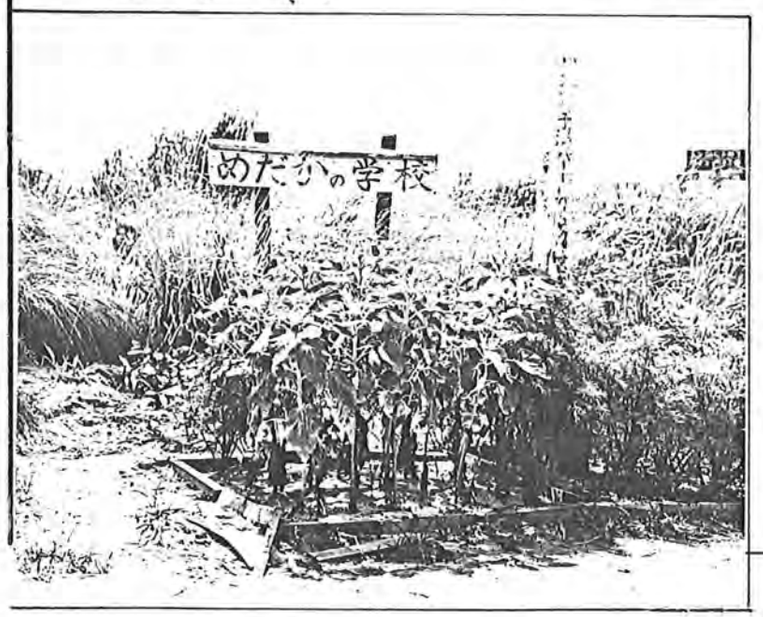
会費年2000
創立 1974.12.9

事務局 0474・51・7076 中村容子

ひまわりが咲いた

「谷津六丁目の、あざみ子供会の皆さん。ほら、あなた方が三月十七日の雨の日、風船にひまわりの種と、君達のお願い事を書いた手紙をつけて飛ばしたそうですね。それを、その日の午後、雨にけぶる干潟の草原で森田は三つ拾いました。そしてすぐ電話して、植えることを約束しました。そのひまわりが、こんなに大きくなって花を咲かせましたよ」。

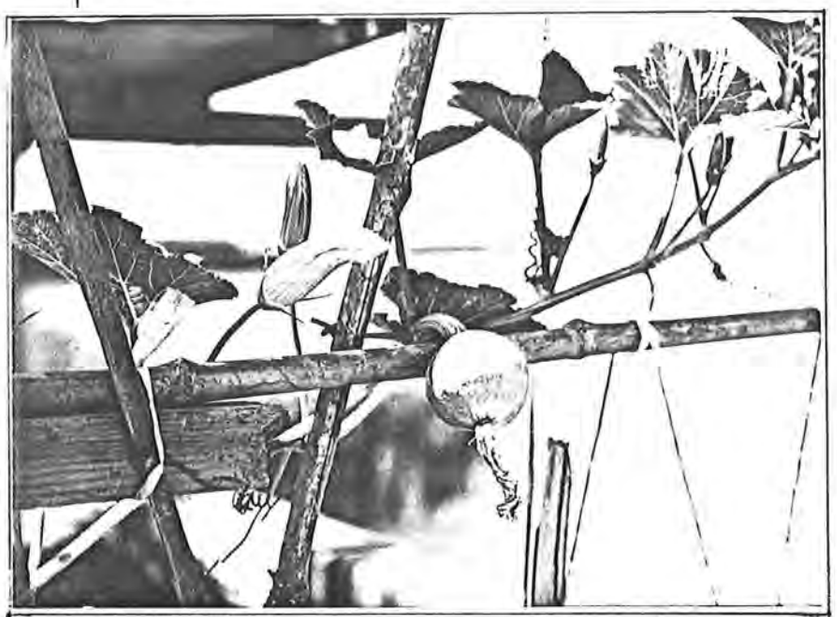
すぐ横で、コスモスが育っています。

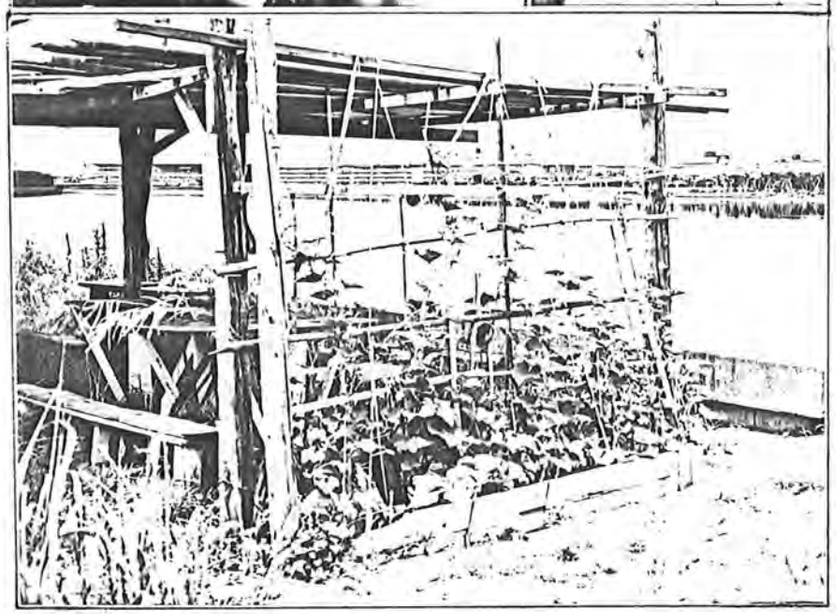


かぼちゃがなった

えぇーと、あれは確か五月頃でした。秋津田地の野村さんが、潟スキーで泥と汗になっている私を、護岸の上から大声で呼んだ。

お菓子とジュースの差し入れに来たのだ。その時こう言った。「森田さん、かぼちゃの種を植えようと思ってね。埋め立て地に大丈夫かしらぁ？。それでね、とし出来たらつるがどんどん伸びてくるから、棚を作ってやろうよ。そうすれば、陰が出来てとっても涼しいよ、どお？」と。――やがて花咲き、実がなりました。





町会よりカンパを頂く

この度、「谷津3丁目町会」より一万円のカンパを頂きました。

地域における「環境衛生費」の為というとの事です。クリーン作戦に使って下さいとの事。毎年頂いております。有難く利用させて頂きます。

谷津3丁目という所は、干潟や旧遊園と一番近く、最も古い町です。10年程前は、干潟の悪臭やゴミという大きな悩みを抱えていました。それだけに、私達はひときわ大きな励ましです。

三度目の挑戦

アヒルの卵

谷津干潟には今、四羽のアヒルがいますが、三羽のグループの方がまた〈卵を産みました。これで三回目。

一回目は六月の高潮で、次は台風でダメになってしまいました。三度目の正直といいますが、今度は無事にヒナの誕生を見たいですね。

コアジサシと共に（11）

台風でコロニーは全滅

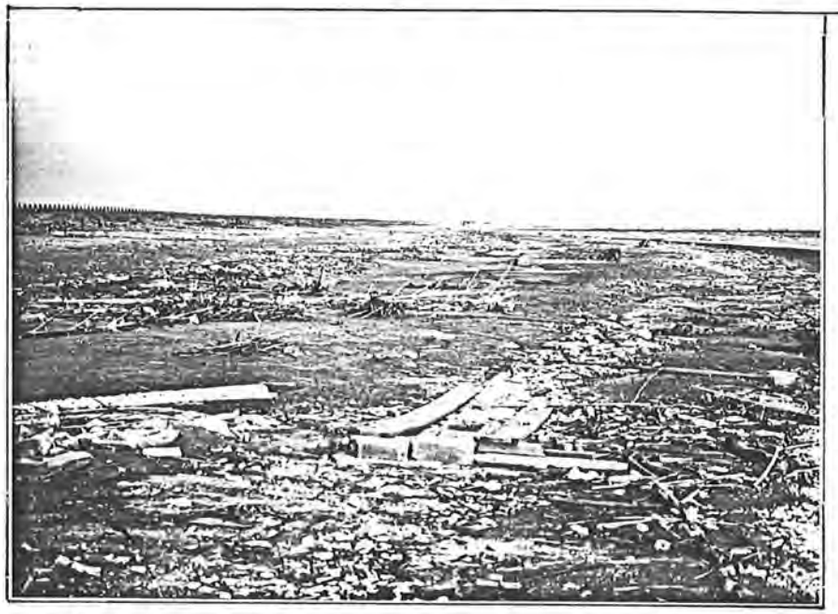
今年のコアジサシ・シロチドリ・コチドリ繁殖調査は、ほんとうにあっけない幕切れでした。

去る6月末に来た台風による高い潮位と波の為、幕張の人工海浜（芝園のすぐ隣）のコロニーは文字通りひとつ残らず巣は全滅してしまいました。

台風が来るまでは、巣の数が40程ありました。しかし、台風の後、2日後に心配して行って見ましたが、コアジサシ、シロチドリ、コチドリ共、全く見つけられませんでした。

打ち上げられているゴミや、砂に残された波の跡からして、殆んどの巣が水に沈んだり、卵が流されてしまったようです。又、少し高い位置の所の巣は、たとえ親が抱いていても、強風や波のしぶき、あるいは飛んで来る大量のゴミの為、まずとうてい卵を温められる状態ではなかったのでしょう。

繁殖期の後半のことでもあり、台風以後、コロニーは形成されませんでした。



盛んに産卵し、これからヒナが産まれるという時に、本当に残念でした。

巣があった所は、全てゴミで埋められていた。

今年は台風が来るのが、早すぎたのです。

夏の日に・・・

ふかんど

第351号

1985.9.5

谷津干潟愛護研究会
〒275 習志野市谷津三七二 鎌荘E号
電話〇四七四－51－五〇四四
文責 森田三郎

会費年2000

創立 1974.12.9

事務局0474・51・7076 中村容子

建築廃材と闘っています

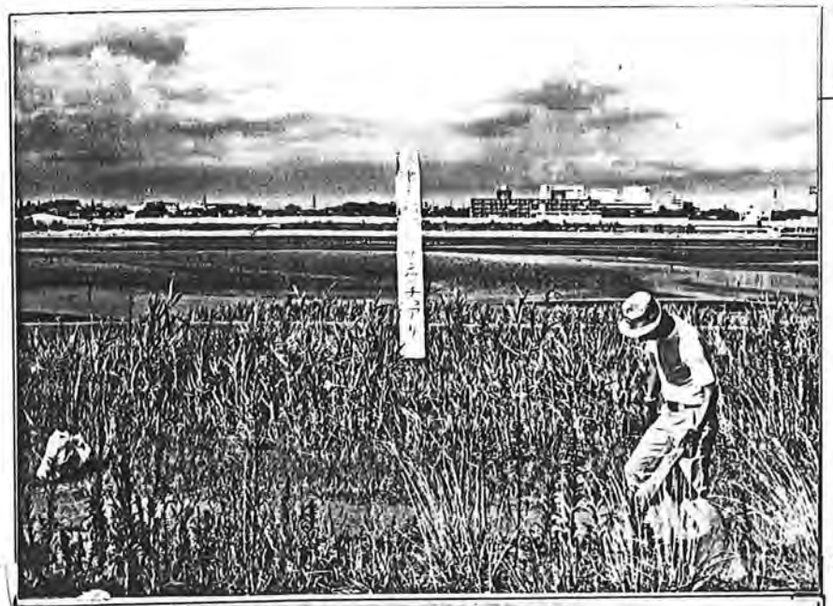
森田は今、旧谷津遊園の前の干潟で日々、遊園が当時干潟に捨てた建築廃材と闘っています。かなりの時間をここに投入しているので、他の所でクリーン作戦をしている会員の方々に、少なからずご迷惑をかけていると思います。

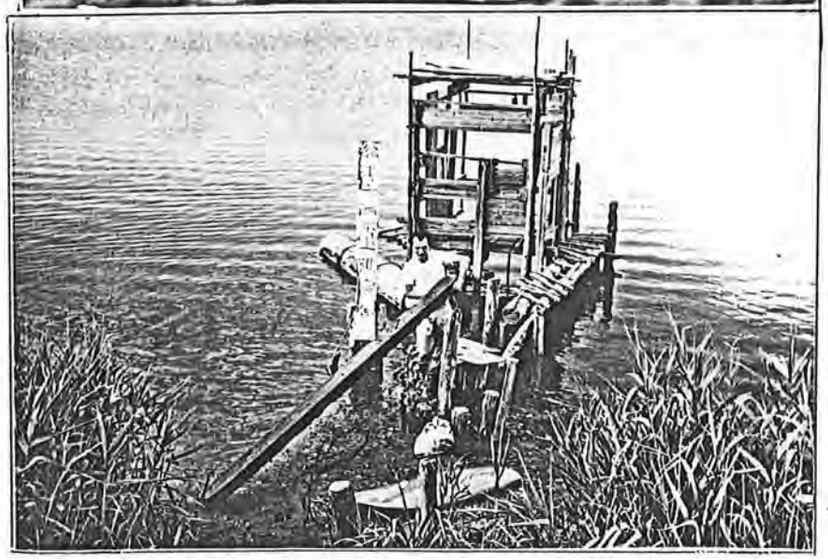
クリーン作戦を始めた当初のことが、今ここで又再現されています。でと、捨てられていないだけ、幸いなんですね。

木陰で暢孝くんや彰吾くんと共に、休みながらご飯を食べ、ジュースを飲む。

ひとりで行き、やり、帰る

山崎紋司さん。猛暑が続くある日。私はタクシーで、干潟で休もうと思って「いそしぎ」に向ってゆっくり走っていた。そしたら、炎天下で唯ひとり、山崎さんがゴミを拾っていた。日曜日毎の「谷津干潟友の会」にも時々来るけど、この日の如く、よくひとりで来ては黙々と作業している。丁度、山口昭三さん(74)に似ている。山崎さん、体は余り強くないのだが。





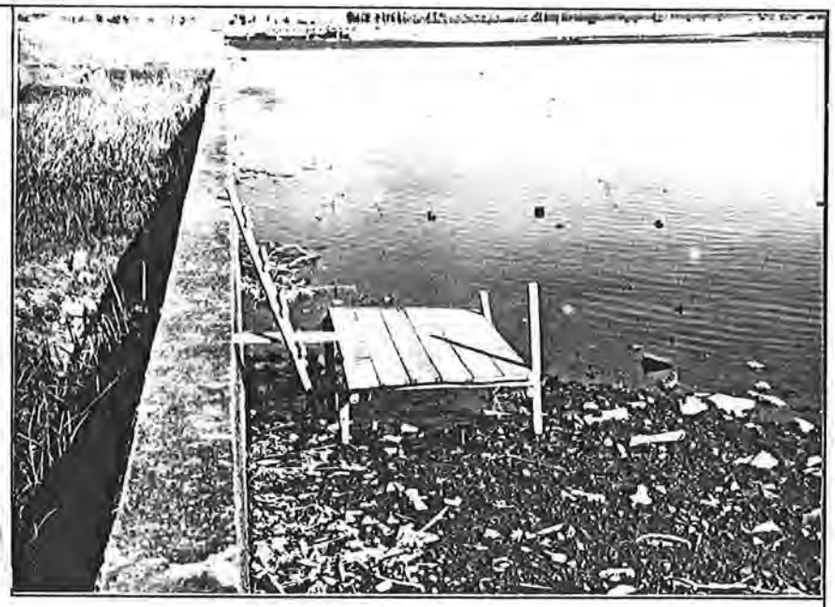
この暑さも、間もなく懐しく想う日が来るんですよ。

ひとコマずつ…

私達のやっていることは、毎日く、そして、ひと月くの、同じようなことの断え間ない繰り返しです。あたかも、モーターの回転や心臓の鼓動知きその。そしてあっちで一つ、別な時に、又こっちで一つと。

単純即変化、変化即単純。わかる？

桟橋を使えるまでにひと仕事



「森田さん、早くこれを使って下さいよ」と、住宅・都市整備公団が桟橋を作ってくれました。11月頃にボートをつなぐ予定です。

下半分は全部谷津遊園が出した建築廃材のコンクリート、鉄骨、ワイヤー、シートなどいっぱい。埋もれているのは見えるものの10倍以上。まず、清掃しなくては。

テレビ放映のお知らせ

9月11日(水)・日本テレビ④ 10時半。

「健康ーいきくワイド」。

聞くところによると、"生きがい"あるいは"自然にかえろう"というのがテーマですって。クリーン作戦から、長塚さん、本田さん。行政から三上市長さん。バードウォッチャーからと。その他として森田を談話。

クリーン作戦って、運動と健康にいいですよ。

谷津干潟で二年ぶりに発生した藻＝習志野市谷津の谷津干潟で

二年ぶりに藻 浄化を裏付け

野鳥の楽園「谷津干潟」

8月11日

県内でも数少ない野鳥の楽園、習志野市谷津の谷津干潟でこのほど、二年ぶりに藻が発生した。干潟のクリーン作戦を進めている谷津干潟愛護研究会（森田三郎会長）がこのほど確認したもので、「干潟の水質浄化を裏付け、野鳥の生息にいい結果をもたらしそうだ」と期待を寄せている。

谷津干潟は四十六年からの第二次埋め立てで、還流した粒の細かい泥で埋まり、窒息状態となって、四十九年ごろには魚介類がほぼ全滅した、とされる。ところが、森田さんが五十年九月から始めた干潟のごみ掃除が功を奏し、二年後に貝類やカニが復活、これらをえさとする渡り鳥が約一万羽も飛来するようになった。また、一昨年秋には、水路の出入り口に近い干潟の南側四カ所で藻が発生、順調に生長を続けている。

今回、藻が見つかったのは、水路から遠く、ごみが多かった谷津遊園跡地そばの干潟北側。藻はアオモと呼ばれるもので、七月十三日に森田さんが見つけた。

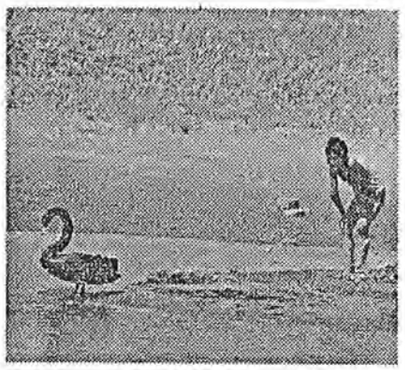
藻は岸から二十㍍離れたところで約二十㌢あった。三日後には雑食性のカモに食べられたらしく、藻の跡形はなくなっていたが、研究会の人たちは「また新しい藻が根付くはず」と心待ちにしている。

東京湾の生物を研究している東邦大理学部の風呂田利夫助手（海洋生物学）は、「リンや窒素を使い、泥に酸素を供給する藻がたくさん発生すると、水がきれいになるだろう。カニなどの小さな生物も住みやすくなるのではないか」と話している。

8月28日

あっ…コクチョウだ

千葉



コクチョウが一羽、千葉市幕張地区の埋め立て地にこのほど飛来した。船橋市三山一丁目、航空機整備士坂梨輝男さん(三三)が二十四日に見つけ、知人の谷津干潟愛護研究会の森田三郎会長(四〇)＝習志野市谷津三丁目＝に知らせた。

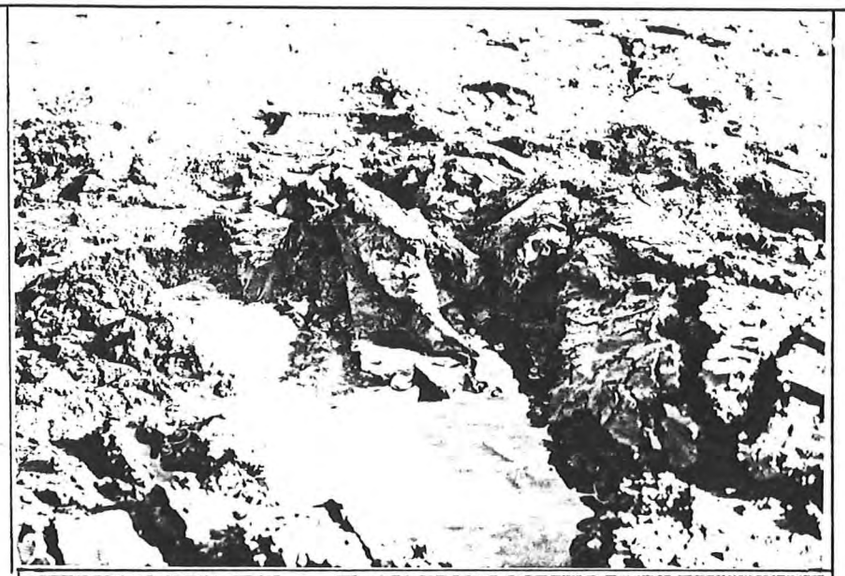
森田さんが二十六日、見に出かけ、カメラにおさめた＝写真。この鳥は体長約一・二㍍、黒い羽で赤いくちばしを持っており、コクチョウとわかった。草の根や水草を食べながら水辺をゆっくり歩いており、近寄っても飛び立とうとしなかったという。

森田さんは「三年前に一羽、今年の冬、五羽のハクチョウが飛んで来たがコクチョウは初めて」と驚いている。

コクチョウが渡って来るのは冬で、これまでこの場所には飛来したことがない、という。人なつこいことから、どこかで飼われていた可能性もあり、飼い主を探している。近くには、野犬が出没しているので、二十九日に市川市の行徳野鳥観察舎で預かってもらうことにしている。

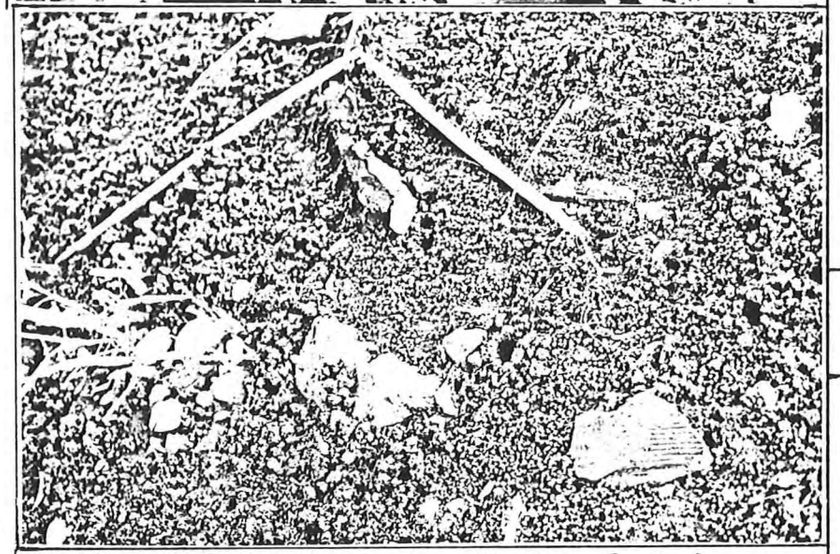
タウン&ピックアップ

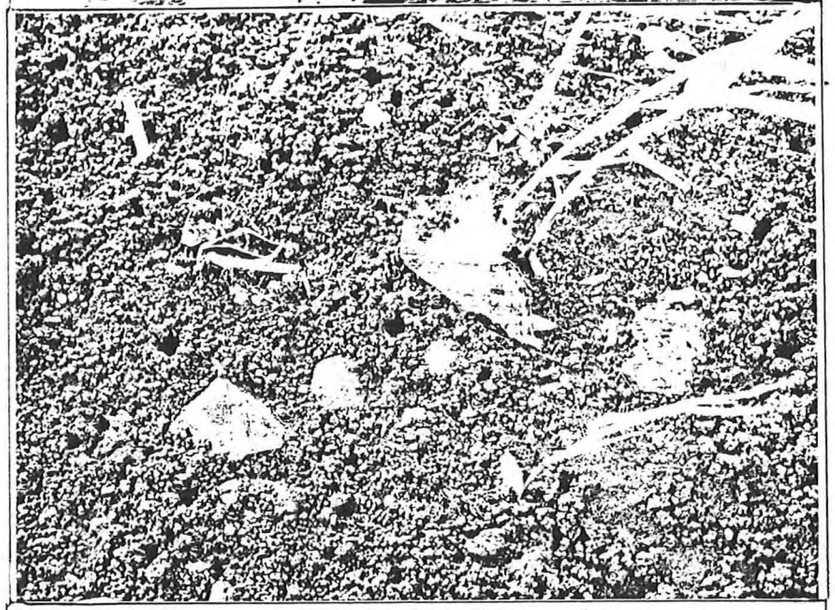
干潟のトゲを抜く如く ―クリーン作戦は前進する―



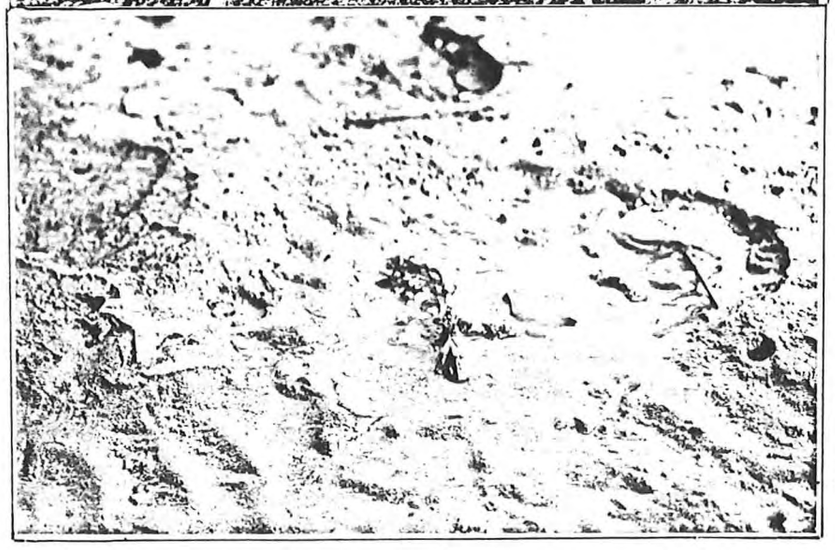
干潟の土の中から、ぶ厚いビニール袋。この他、シート毛布、マットなど至る所で。

ちょっとだけ顔を出していた土管。波と風と鳥とカニが在りかを教えてくれた。





かわら、せとものの、ガラス、コンクリート、石ころ、鉄くず、プラスチック、木片、カン・ビン・ポリ容器類、きれなどが後から後から続々と出てくる。



遊園時代に捨てられた鉄板やビニールが、いかに多くのゴカイやカニの生息を妨げていることか！。でも、拾うそばから次々とその巣穴が出来てゆく。

〈倦まず弛まず〉

ふかんど

第352号

1985.9.17

谷津干潟愛護研究会

〒275 習志野市谷津三ー七ー一 鷗荘E号
電話〇四七四ー五一ー五〇四四

文責 森田三郎

会費年2000

創立 1974.12.9

事務局047-451-7076 中村容子

〝潟ダコ〟

ヒザの下に、タコが出来始めた。ここ2、3ケ月、銭湯に行った時やヒザをついた時などヒリヒリするのである。見たら、皮が厚くなり、固くなっていた。

潟スキーで滑っている時、ヒザをついているので、いつの間にか出来てしまったのである。

お詫びと訂正

先にお知らせしました、日本TVの「健康いきいきワイド」は10月4日(金)10時半の間違いでした。ここにお詫びを申し上げます。すみません。

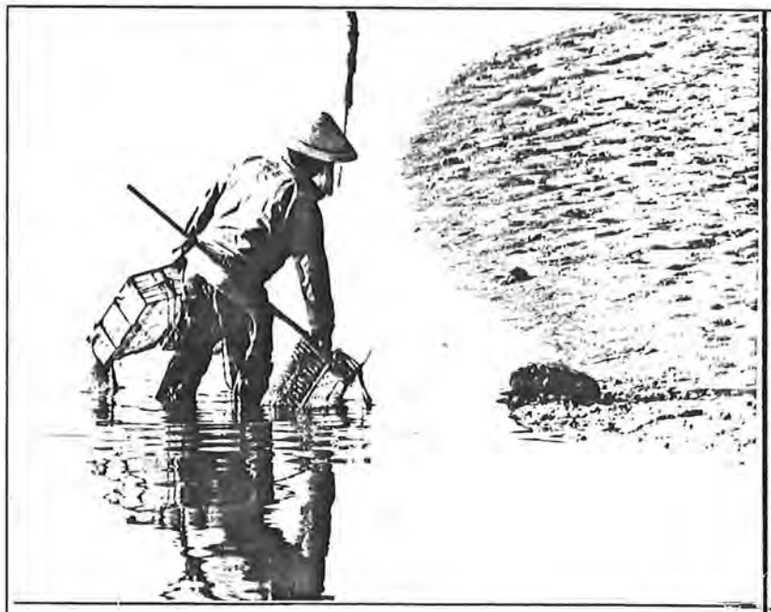
谷津干潟を、「ふるさとづくり」の為にも皆で協力しよう。

谷津三丁目団地の工事中の水たまり

小さく白く点々としているのはウミネコの群である。すぐそばで、杭打ち、ブルドーザー、ダンプカー、人の声がある。余り気にならないのだろうか、作動している機械のすぐそばを飛んでゆく。多い時は1000羽以上来ている。

干潟の干満に合わせ、行ったり来たりしている。この他、各種のシギ、チドリ、サギ、アジサシ、カモも来ている。

あさり採りのおじさん



頑固一徹そうな、その顔つき

名前も知らないし、住んでいる所も知らない。年がら年中干潟に来てアサリを取っている。私は時々話をする。

チフつきや道具からして、地の人であろう。自転車だから、家は近いのだろう。かなりの手配であるが、体はがっしりしている。以前は漁師だったという。貝を上手にむいて、貝がらはそこいらに放り出していくのである。

〝潟ダコ〟

→この種の人達、何しろアクが強い。が、懐に入れば、境地は開ける。

潟スキー〝ふかんど〟に入る ＝谷津干潟クリーン作戦＝

ふかんど

オ353号

1985.9.30

事務局 0474-51-7076 中村容子

谷津干潟愛護研究会
〒275 習志野市谷津二丁目一番地
電話〇四七四-五一-五〇四四
文責 森田三郎

会費 年2000

創立 1974.12.9

30年ぶりに、〝ふかんどの杭〟に触る

9月18日(火)午後。潟スキーで〝ふかんど〟に入った。

〝ふかんど〟だった所の境界を教える為に立ててあった、古い杭の間を滑り抜ける如く入って行った。〝ふかんど〟に入るのは、今日が初めてである。

この日、タイヤー本、大きなシート2枚、大きなビニール2枚、ビールケース2つ、バケツ2つ、そして、ビニール袋に大小のビニール袋、ビンなどをひと袋拾ってきた。

幼き日の記憶を甦らせた、古い〝ふかんどの杭〟

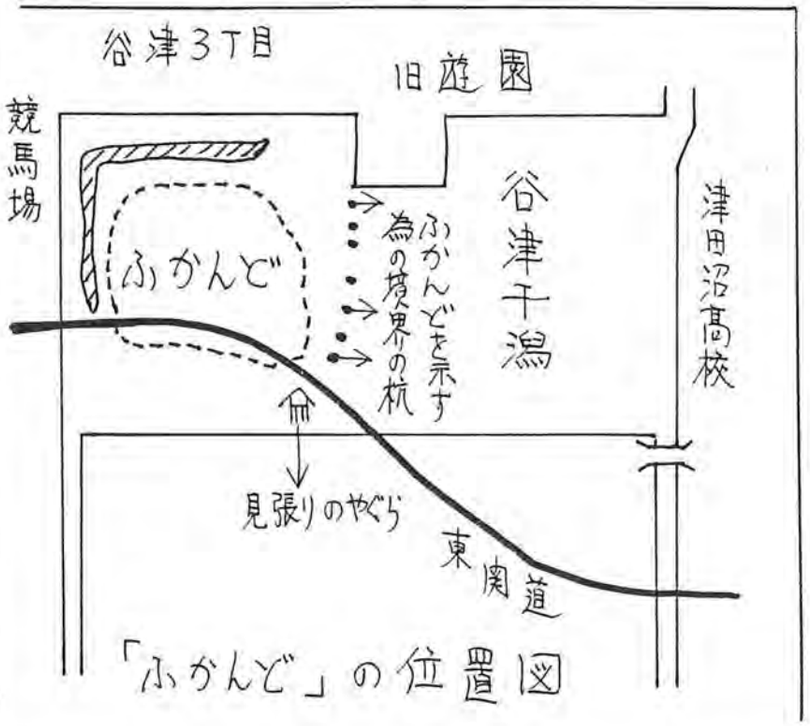
今から11年前の昭和49年。寒い頃だった。ある日、新聞に、「埋められゆく谷津干潟」と題した記事が出ていた。

谷津干潟――――?。私には、それがどこなのかわからなかった。が、その記事の写真の片隅に、何本かの、変に曲った杭が写っていた。「おや、――――何だか、どこかで見覚えがありそうだが――――?」、と思って少時く見ていた。「もしかしたら、ひょっとしたら、あの〝ふかんどの杭〟ではないだろうか――――!?」。

数日したのか、谷津に来た。まだ納涼台が残っていて、その持ち主、老人に、「あの―、この記事の谷津干潟っていうのはこの前にあるもので、昔、〝ふかんど〟って呼んでませんでしたか?―」と聞いた。「――おお、そう、そう言えば呼んでいたなあ」と言った。それが、全ての、出発点、きっかけだったのである。

× × ×

クリーン作戦は新たに、昔の〝ふかんど〟でも展開されるようになりました。谷津干潟が現在の形になってから、初めてであり、全くの手つかずの所でした。しかし、〝ふかんど〟という名が示すように深い所でもあったので、当面森田一人でやり、他の人は少時く見合わせて下さい。

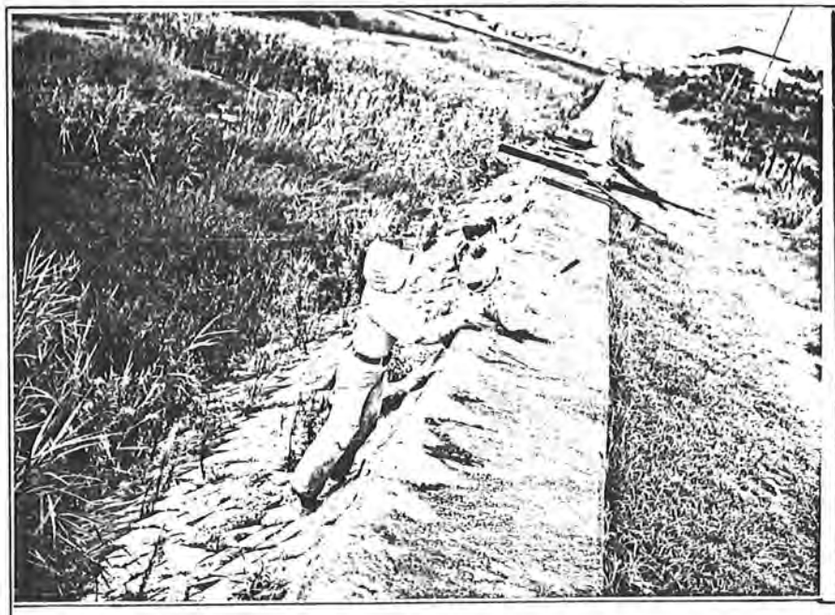


「ふかんど」の位置図

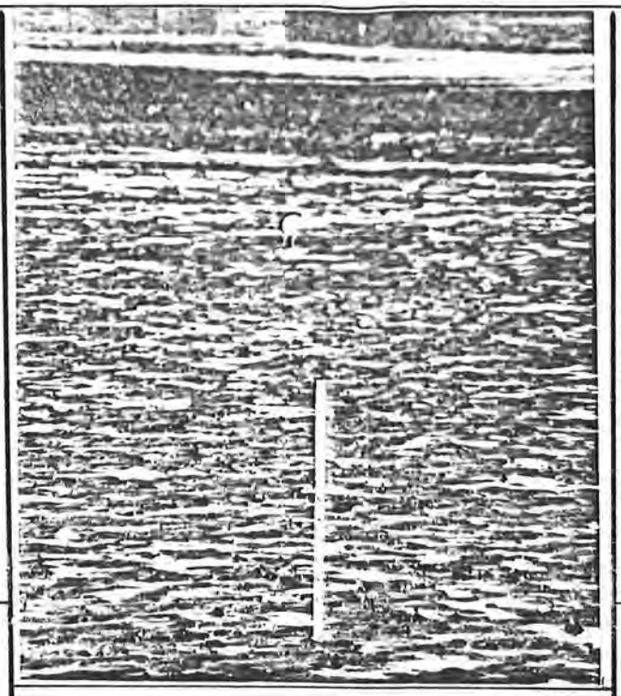
「ふかんど」は当時、水深4～5m位。大正の末、谷津遊園造成の為に埋られたのである。

「ふかんど」で遊んでいた子供の頃、この杭によくつかまった。そして、今また触るのはとっても懐かしいもの。

気をつけてねえー！



§律君の流量調査§

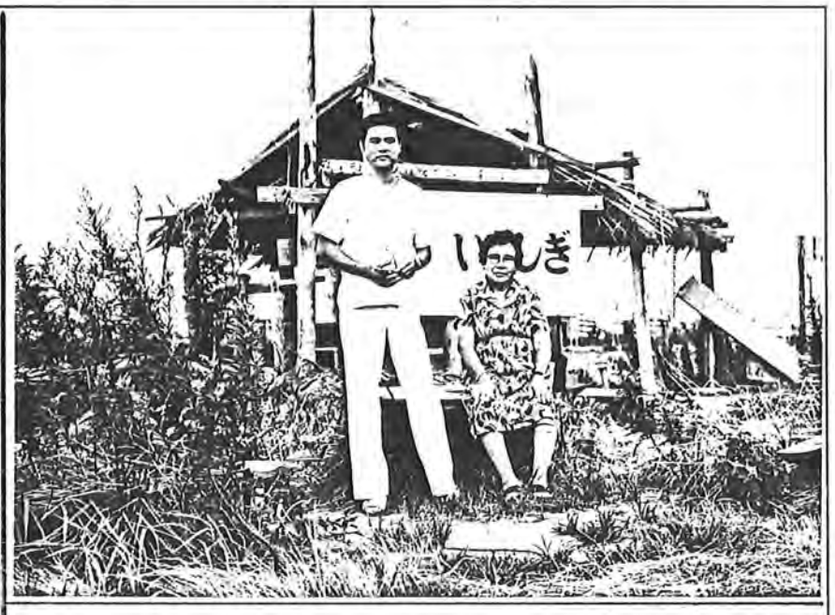


長塚律君（秋津・中二）は、夏休みの課題として、谷津干潟の干満のたびに流入する潮の量を調査しました。

今まで、流量調査は誰をやっていません。

1cmの目盛を刻んだ白い角材を四ヶ所に立てて行ないました。炎天下の日中、双眼鏡とノートを片手に、大いにがんばりました。

母と弟が干潟に来た



「なんでまあ、こんな所に……」

干潟を見て、母はそう言うのであった。今までに、干潟に来る度にそんな調子の言葉を聞いた。

8月15日。母（みち）と弟（四郎）が来た。母を弟を、ふかんど時代を知っている。

「三郎、お前はなっ、人生の最も大事な時を、こんなとこで使ってしまったんだど。母ちゃんは、今でもお前のやってんことに反対だがんな。今からでもいいから、早えとこやめて、母ちゃんを安心させろ」と。

「母ちゃんには、わかんねえな、こんな所がよ」

二人だけのクリーン作戦

8月20日（火）。第133回谷津干潟クリーン作戦である。それでも、ゴミ袋を12、一輪車二台分のゴミを拾った。皆んな、田舎に帰っていたり、子供や家事、あるいはいろんな用で来られなかったのである。

とは言っても、私達のクリーン作戦、山口さん、山崎さん、長塚さん、中村さん、山中さん、そしていろんな会員の方が常日頃、一人でもやっているのである。

谷津小学校の授業で講議をします　〜　更に、カニヤゴカイが増えますよ

ふかんど

第354号

1985.11.1

谷津干潟愛護研究会
〒275 習志野市谷津三丁目一番地E号
電話〇四七四―五一―五〇四四
文責 森田三郎

会費年2000

創立 1974.12.9

事務局0474・51・7076中村容子

・・・この時を待っていた

会員の皆様が、干潟周辺のゴミ、つまり、上と下を含めて、拾ってくれているお陰で、広い干潟の中央部でかなりの力を、時間を使ってクリーン作戦が展開出来るようになりました。

昭和50年当時より、何とかして、干潟そのものの中のゴミを撤去して、〝ふかんど〟の重荷を軽くしてやりたいものと、強く願っていました。

「この時」とは、すなわちそれです。

ゴカイヤカニが増えると悪臭を消えてゆく

事実として、又、私達の経験からしてもそうなのです。その具体的数値はちょっと出せませんが。

干潟の保全・甦生には、次の三点が重要なのです。①下水、②ゴミ、③周辺緑地がそうだと把握しています。

今の干潟は、所謂〝損〟をしているのです。今の面積でも、更に生きくとさせ、良くする事が出来るのです。クリーン作戦は、其れを実証し、推進するのが目的です。

習志野市立谷津小学校の4年生は、授業で「東京湾の開発」ということをテーマに、ここ数年やられているとのこと。特に、地元習志野の海のこと、中でも谷津干潟のことに力を入れてやっているそうです。

全国集会で発表したという授業記録のコピーを頂きましたが、中々本格的で、子供達の心に思ったことの言葉は、とても興味深いものを感じさせました。

テーマは、「何故そんなにまでして干潟を守りたいのかつ」そういうことらしい。

つまり、森田をダシに使って、郷土心・郷土愛を育てたいんですって・・・?!

クリーン作戦に心強い協力

住宅・都市整備公団が、クリーン作戦で引き上げたゴミをきれいに持っていってくれました。

旧遊園地側からのクリーン作戦は、今年の7月頃より展開しており、今後も息長く続けていかねばならない所です。

ゴミの引き取りといい、立ち入りの自由といい、本当に公団の好意と協力があってこそ遂行成し得られるもの。御礼と報告をかねて、その事、会員の皆様にお伝え致します。

・・・当の本人に分らないのに、それを、人に話せなんて、出来るかしら。

死して干潟の土となる　或る青年のものがたり

遺言

「お母さん、先生。あのね、僕が死んだらね、そしたらその灰をね、谷津干潟に撒いて下さい。そうすれば、僕は、谷津干潟になれると思う。お願い、ね、きっとだよ---」。

死後、その遺言の如く、彼の灰は、長年介添をなさった先生の手によって撒かれた。

「森田さん、ちょっと、いいでしょうか---。あのう、ちょっと。どうしてもお話しておきたいと思ってましたのでー---。---よろしいでしょうか」。

ある会合で、干潟の話しをしてくれと頼まれ、2時間程の話を終えた私に、その人は応接室に入って来て、不治の病と日々闘い、若くして亡くなった或る青年の話をした。

そして後日又、今度は、彼が子供の時から生活万般にわたって介添なさったその先生とお会いした。

彼は、谷津干潟、渡り鳥が大好きであった。冷たい北風の吹く真冬でも、炎天の真夏でも、先生に車イスを押してもらって来て、いつまでも観察していた。

彼は、己が体と、其の"行く先"を知っていた。それは、除々に、全身に行き渡んでいくものであった。歩くことは勿論、望遠鏡を操作することも、ついには、本のページをめくることも。はては、ずっと続けていた、鳥のスケッチの為の、その鉛筆をすら持ち、握る力まで無くなっていった。

必死に鳥を描んとする彼は、死の近づいた日々、鉛筆を口にくわえて描き続けた。

鳥を見る為、車イスで日光や北海道にと行った。しかし、谷津干潟が一番好きであった。彼は、干潟の南側、埋め立て地側に、何度も〈〈行きたいと言っていた。が、女の先生の体力、道路なでが許さず、それはついに実現しなかった。「ぼくは、鳥になりたい。そうすれば、好きな所に飛んでいけるのに---」。

寒さの中、感覚も力もなくなり、冷たくなっている手足の存在感すら感じなくなって彼は、その目で干潟と渡り鳥、対岸や空を見つめるだけだった。

「お母さん、先生、ぼくは、何とかしてあの谷津干潟を残したい。どうやったらぼくは出来るのか---。死んだって、ぼくは、あの世から、谷津干潟を見つづけているからね---」。

あぁ、そうか、そうだったのか---。あの時の、あの車イスの青年と、女の人がそうだったのか。ひざと背中にもうかけていたっけ。時あたかも、私は、ゴミの山と闘っていた時だ。二人の目前で日々。知らなかった---。そうか、私達の知らない別のところで、もう一つの流れがあった。

・・・死後、彼のこと、そして彼の願いは、女の先生とある方によって、習志野市の上層部に伝えられたのであった。

ふかんど

第355号
1986.1.1
谷津干潟愛護研究会
〒275 習志野市谷津三七七 鷗荘E号
電話〇四七四－51－五〇四四
文責 森田三郎
会費年2000
創立 1974.12.9
事務局 0474.51.7076 中村容子

今年も元気でやろうよ

「つまり、そのう、そう生活なんですよねえー」

みなさん、そう思いませんか？。何がって、いつも、ほらあ、私達みんながやっていることが。

それはそうと、

会員の皆様、
本年も明けまして
おめでとうございます

去年は、事故とかケガがなくって、本当に良かったですね。森田はいつも、どんな時にも心配しています。

出来る人が、出来ることを、出来る時にやっていきましょう。表われたものよりも表わすものを、受けるよりも与えることを、問うよりも応えることを、作られたものよりも作り出すものを、価値よりも価値あらしむるものを大切にしよう。

あのシンデレラ姫物語の、作られた馬車やガラスの靴よりも、それを作った「魔法の指」を作り、育て、大切にしましょうよ。

いつか、きっと・・・そう想っていた

"谷津干潟はね、
君達のものなんだ"

それを、このひと言を、地元谷津の子供達の前で、はっきりと、確と言いたかったのである。

今からもう、八、九年前、いつとはなしに心で願っていたことが、その夢がかなったのである。

十一月二十日、そして又十二月十九日と、市立谷津小学校四年生の授業に、コミュニティゲストとして参加し、話をさせて頂いた。四年生三クラスの全部に。

生徒の関心とそのテーマは、「なぜそんなに、谷津干潟を守りたいのか？」ということであった。

校長先生、教育委員の方、他校の先生方を聞いてくれた。話しの後、次々と出る質問に、時間が無くて応じきれなかった。

この後、実に二十八年ぶりに、生徒に混って教室で給食を食べました。

機会を与えてくれた先生方に感謝します。

目の前の、子供達の頭上の彼方に、自分の子供の頃の姿を、私は観ていたのかも知れない。みんな、谷津干潟を頼むよ。

町にとけこむ谷津干潟

～あれぇーっ、ヤドカリたちも！

きれいになったからかな

たくさんのヤドカリが、パンのミミを食べていた。

ここは東水路の出口、護岸直下の干潟です。今、無数のあらゆるゴミを根気よく清掃している。泥質から砂質へと移行する中、ヤドカリがずい分増えました。そこの水の中で、カモメに投げたパンのミミを、こそこそ食べているのです。

緑地には、森林性の鳥が

谷津干潟のそばの、湾岸道路の緑地帯が出来てすでにまる八年。木をだいぶ育ちました。

木と常緑樹が大部分、実のなる木とあるせいか、森林にすむ鳥の姿が見られるようになりました。十一月には秋津の吉種さんがトラツグミを。十二月には会員の山口さんがフクロウを保護しました。

フレスコ画

「谷津干潟」が完成

鷺沼の岡崎さん宅玄関に

フレスコ画の前に立つ宇井由美子さん（左）と岡崎ノブ子さん

鷺沼二丁目の岡崎隆二さん宅玄関にフレスコ画「谷津干潟」が完成した。壁二面には十五羽の水鳥が舞い、訪問客にぬくもりと詩情を感じさせて好評だ。

このフレスコ画を描いたのは東習志野の宇井由美子さん。夫の転勤で二年間イタリア生活をおくった宇井さんは七年前、スピア湖近くの礼拝堂で初めてフレスコ画に出会った。フレスコとは古代ローマ壁画の代表的手法で、しっくい壁面が生乾きのうちに顔料を水に溶解して彩色する画法。若い頃から絵に興味をもち、自らも絵筆を握っていた宇井さんはフレスコ画の東洋的な色合い、落ち着き、深みに魅せられ、帰国後も当時東京芸大大学院講師だった丹羽洋介先生の集中講義を受講した。持ち前の研究熱心さで壁塗りの技術も左官やさんから習い、これまでに四作を完成。自宅の他に三上文一市長宅には「四季の花と風景」を、習志野高校玄関には大作「牛」を生徒と共に製作した。

岡崎さんは谷津干潟の近くに住んでいたが一年半前、鷺沼に転居。移り住んだ家の玄関壁の改装をノブ子夫人の友人である宇井さんにもちかけ、テーマに懐しい谷津干潟を選んだ。

古い壁の削り落としから始まり完成までの一カ月は、しっくい壁の下塗り、中塗り、上塗りとねじりはちまきの重労働。絵は壁が乾くまでの数時間が勝負とあって、かなりの集中力を必要とした。

「最初はちょっと不安でしたが、習高の「牛」を見て安心してお任せしました。満足しています」と喜ぶノブ子さん。

「フレスコ画はいつまでも色彩が鮮明で退色しません。上塗りに顔料を混ぜてあるので半年位すると顔料が浮き出て、深みのある色合いになるのも楽しみです。壁そのものが生活の一部になってくれれば…」と宇井さんはにこやかに話す。

動物が大好きな四人家族の岡崎さん宅には犬や猫が八匹同居。玄関の水鳥十五羽も加わってますます賑やかで楽しい家庭になることだろう。

フレスコ画希望者は宇井さん（電話七五一六九三〇）まで問い合わせを。

「ならしの朝日」1985・11・20

コクチョウが一羽、谷津干潟に飛来し、のどかにエサをついばむ姿や翼を広げて飛ぶ雄姿が干潟を訪れる人の目を楽しませている。

黒い羽に赤いくちばしのコクチョウは体長約一・二㍍。飛行中は真っ白な羽の先が広がり、コントラストが美しい。

ことしの夏、幕張の埋め立て地に飛来し、干潟に姿を見せたのは十一月四日から。毎日朝九時ごろ飛んで来て、夕方四時ごろ幕張に帰っていく。日中は真っ白のユリカモメ二千羽の中に真っ黒のコクチョウ一羽が混じってエサをついばんでいるが、夕暮れ時になると別れを告げているのか「クエッー、クエッー」と鳴き、羽繕いとウォーミングアップを整えてから豪快に飛び立つ。見学者の頭上を低く飛ぶこともあり、迫力ある飛行が話題を呼んでいる。

人馴れしているところから野性の鳥ではなく、どこかで飼われていたのでは…と推測されている。

このコクチョウ、今ではすっかり干潟に居ついてしまい、どう帰らなくなってしまいました。私達の顔を見ると、鳴きながら近づいて来るのです。

いろんな人が、いろんな形と所で、谷津干潟をくらしの中にとり入れてくれると、ほんとにいいですね。

岡崎さんは、クリーン作戦の発足時、協力してくれました。近々、是非拝見しに行かせて頂きます。

観察舎が出来たら、宇井さんのような方に壁画を画いてもらいたい。

山口さんのフクロウ、ぬれて弱っていた。宮脇さんがその日は介抱してくれ、翌日行徳に届けに行ってくれました。

ふかんど

第356号

1986.1.17

谷津干潟愛護研究会
〒275 習志野市谷津三ー二五ー十一
電話〇四七四ー51ー五〇四四

文責 森田三郎

会費年2000

創立 1974.12.9

事務局 0474・51・7076 中村容子

"こりゃぁ、本格的だ"

パン投げのことである。

今から6、7年前は、人が護岸に立っただけで、そばにいたシギやチドリ、カモなどは飛んで逃げていってしまったものである。

しかし今は、誰がやってもカモメやカモ群がってやって来る。2年前は、人が多いと中々来なかったが、現在は全くそんなことはなくなった。去年の12月、初めて皆んなの前で、護岸のパンを食べに来るようになり、次に草地に、そして今年は更にユリカモメは、ベンチの上や道路まで来るようになった。又、「カモメおばさん」の中村さんの手から、30cm位の所までと来ている。パン投げは今は、多くの市民が主役で、立派な触れ合い、"実証"である。

"自分のすぐ目の前まで野鳥が来る"、そういう事で、一人でも多くの人が、関心を持ち、干潟に愛着を抱いてさえくれたら---。

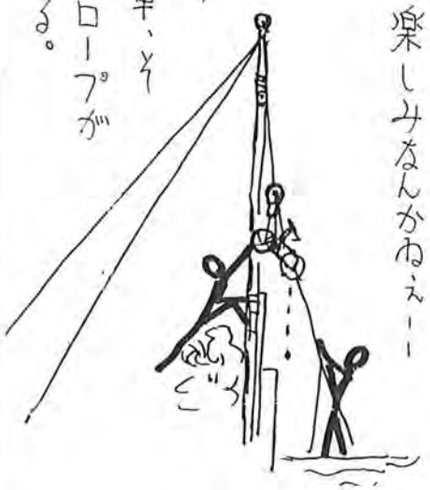
それは触手であり、港であり、アンテナである

励まされますよ、山口さん！

暮の12月12日のこと。快晴の干潟で潟スキーから上って、日当りの良い草むらで休んでいた。

すると、向うから山口さんが自転車でやって来た。「やぁ、こんにちわぁ」と私が言った。自転車と止めて山口さん、荷台を指しながら、「森田さん、実は私は今日はね、念願のバイクに挑戦しに来たんですよ。あの遊歩道のそばの干潟の中に捨てられているヤツをね、何とか引き上げてやろうと、一人で挑戦するんですよ」。更に、「クリ！シ作戦に参加して以来、散歩で通る毎に、見ながらどうやってやっつけてやろうかと考えてたんですよ。んだから私はね、アレをやっつけてしまわないと、安心して正月を迎えらないんですよ、ええ。それで今日は、ちゃんとその用意と覚悟で来たんですよ。まぁ、年寄りになっちゃうと、こんなつまんないことが楽しみなんかねぇー」と。

後で行ってみて驚いた。二本の丸太の支柱、ダブルの滑車、そして支柱には二本のロープが張ってあったのである。



「かって本職でしてねーー」と、山口さん。

この人、いつも一人でマイペース。

「たけのこしんぶん」 第15号 昭和61年1月7日

どんぐり拾いの子供たち

「あれっ、ねえ君たち、そのどんぐり、どこで拾ってきたのぉ？」。

両手とポケット、そして子供用の弁当箱にいっぱいのどんぐりを入れた、男の子と女の子の5人のグループは、「うん、あすこのほらぁ、干潟のむこうにある木の所で拾ったの」と言って私にどんぐりを見せてくれた。

そこは、湾岸道路沿いの緑地帯。

---あぁ、私達は、やってきたんだなぁ---。

そんな実感がこみ上げてきたひと時でした。会員の皆さん、今までいろんな事で、何度ととそういう時がありましたが、これもその中の一つ。

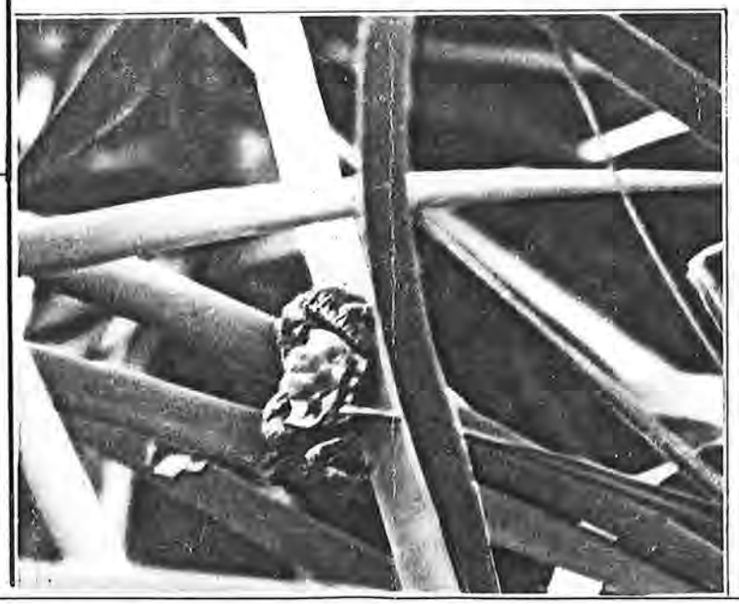
当時、道路公団の人が、鳥の為に実のなる木を、と言って植えてくれたれれど、今、子供達の為にもなっている。

「どんぐり拾いか---、そらあいいやあ」。

知ってますか、カニの〝草のぼり〟

クリーン作戦をしていると、実にさまざまな光景を、干潟のあり様を目にします。

潮が満ちて来て、護岸のすぐ下までせまっていました。ただ一ヶ所がマが茂っている所でふと見ると、カニが、そこいらじゅうでいっせいに、草に登っているのでした。又、護岸の石にも流木にも、ゴソゴソと。



谷津三丁目の前では、カニは護岸を乗り越え、草はらまで入り込んでましたよ。

家族新聞

作っているのは、干潟のすぐそばの秋津団地にお住まいの大竹さん一家。

年一回発行の、家族みんなで作るんですって。

そして、親類や友人に配るとのこと。いいですね。

谷津干潟とり上げてくれて、うれしいなあ。

谷津干潟

谷津干潟、昔はここで潮干りができたものです。我家から歩いて五分位の所に約35ヘクタールの拡大な干潟が残ってます。先は東京湾へと続いています。周囲はマンションや一戸建が立ち所々、なごりの木船をみることがあります。十二月の上旬のこと、黒鳥の群がはぐれたのでしょう。今年初めてのことです。この自然を野命に守り続けている人がいます。その方はテレビや雑誌で時折写真と共に紹介されています〝森田さん〟です。森田さんはここで生まれ、昔ここで泳いだ少年の頃の追憶を捨てきれず、結婚もせず、私財を投じてこの干潟を懸命に守り続けているのです。近所のパンやからパンの耳を集めて餌付けているのです。ゆりかもめ、かもしぎをはじめ、多種の野鳥の憩いの場となっているのです。今では黒鳥も森田さんの孤独の所まで近づいて来るそうです。日曰日には、バードウオッチングのグループの方が大勢おこします。夕方になると、これらの野鳥は群れをつくり、夕焼けの空へと舞い上ります。我家の庭にも時、日中、時折珍しい鳥が遊びにやって来ます。野鳥と対話してみませんか！ 是非お出掛け下さい。

編集長 大竹祥公
書記長 大竹圭子
らくがき班 由記子・恵美子

何度もあったことだけど・・・〜「コッコ」と「クロ」

ふかんど

第357号

1986.1.24

谷津干潟愛護研究会
〒275 習志野市谷津三ー二五ー十一
電話〇四七四ー五一ー五〇四四

文責 森田三郎

会費 年2000

創立 1974.12.9

事務局 0474・51・7076 中村容子

干潟にいる二羽のコクチョウの名前です。「コッコ」はすでにいるもの(オス)。「クロ」は後から来たもの(メス)。「クロ」は「コッコ」より、少し体が小さい。

「コッコ」は、去年の八月に幕張の埋め立て地の池に姿を現わし、そして谷津干潟に通い始め、ついに干潟に居ついてしまった。「クロ」は今年の一月十四日、市の方が菊田水鳥公園から連れて来て、試しに放されました。

希望と不安を抱きつつ、毎日朝昼晩観察し続けている。今はすっかり仲良くなり、二羽は連れそって泳ぎまわり、みんなの目の前でパンをついばんでいる。これからも温かく見守り、是非ヒナの誕生を実現させましょう。

「死んじまえぇ」、それはないよ

一月十九日(日)のこと。この日は第142回谷津干潟クリーン作戦の日だった。

十二時頃干潟に行き、幸福の黄色いハンカチの旗や望遠鏡、野鳥の看板などの〝七ツ道具〟を揃えた。丁度、千葉県野鳥の会と千葉の干潟を守る会が観察会を開いていた。

ひとしきりして、観察会が終ったので、よし、そういいだろうと思って森田は作業服に着替え、干潟の中へ潟スキーをくり出して行った。

するとすぐに、観察会に参加していた小学生のグループが叫んだ。「おおーい、そこで何やってんだよぉーっ!」、「おんどしれえーかよおーっ!」と。声の調子からして、からかっていることがすぐわかった。拾っている私は、面倒臭いから黙っていた。そしたらその中の一人が叫んだのである。「おおーい、そのまんま落っこちて死んじまえーっ!」と。そして皆んな笑っていた。15人程のグループだったから、先生といたかも知れない。

・・・今度会ったら、ビンタを喰らわすか・・・

まわりの大人は誰も注意しない。その学校に行って、捜し出すことにしました。

「見りゃわかんだろう、見りゃあ。ったくまぁ」。

「クローッ、クローッ!」と呼ぶと、ホントに来るんですよ。

コッコとクロが交尾しました

〝ヒナの誕生〟、
見たいですね、え、
夢ですねえー

そうです、やったんです。
一月24日(木)、午後一時頃。確認したのは、毎日干潟にパン投げに来ている若松団地の、小林幸子さんと田村昌子さん。

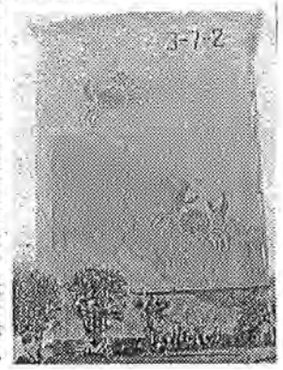
コクチョウのことは、日本野鳥の会・千葉県支部に教えてもらいました。市の公園課にも相談してみるつもりです。

是非成功させましょう。

中々いいねーーー

けっこう見栄えがするんですよ。素敵ですよ。

そうだ、今度干潟のそばに出来る団地にも、是非画いてくれるよう、公団にお願いしてみようかしら。



壁面にカモメとカニ

習志野

団地の側壁にカモメが飛び、カニが戯れる＝写真。こんな味のあるウォールペインティングが習志野市袖ケ浦三丁目の袖ケ浦団地に登場した。無味乾燥な団地風景に柔らかな雰囲気を与え、住宅・都市整備公団が十二棟の壁面を塗り替えた昨年十二月、遊び場に面した二棟に描いた。公団では県内初の試みで、六十一棟全部の壁が塗り替えられる予定の六十二年度までには、さらに魚の絵などを描くことも検討されている。三一七一六号棟には青い海の上を飛び交う三羽のカモメが、三一七一二号棟には二匹のカニがそれぞれ縦十四㍍、横八㍍の淡いクリーム色の壁に描かれている。埋め立て地の団地であることから、海にいる生物を取り上げた。

1月18日
朝日新聞

変貌する海 東京湾 □6

野鳥の楽園あと一息

〝干潟の番人〟森田さんらの苦闘で

干潟は残った

埋め立て地の中に

習志野市谷津三丁目、旧谷津遊園の南側、埋め立て地に囲まれた約四十㌶の水面が谷津干潟である。四十年代の埋め立て推進のあらしの中で、すでに国有地となっていたため埋め立てをまぬがれた。

四十八年に周辺が完全に埋め立てられたころの干潟しか知らない人には今の干潟の姿は信じられないかもしれない。シギやサギがえさをついばみ、ユリカモメやカモが人の投げ与えるパン切れに群がる。満潮にはボラが泳ぎ、干潮にはカニが顔を出す。最盛期には冬鳥五千―一万羽が羽を休める。真夏日の一時期をのぞき、悪臭もほとんど消えた。

「干潟を守る会」「野鳥の会」「谷津干潟友の会」など自然保護団体などの干潟を守る運動があった結果だが、その中で「谷津干潟愛護研究会」代表の森田三郎さん(四五)＝習志野市谷津三＝の働きは異彩を放つ。文字どおり徒手空拳、たった一人で干潟の泥にまみれ、干潟を守ってきた。

森田さんは船橋の生まれ。小さいころ、近くにあった「ふかんど」(現在の谷津干潟)でよく遊んだ。その幼いころの思い出を呼びおこしたのが四十九年に新聞に載った一枚の写真だった。満潮時の谷津干潟の写真と「なくなる?谷津干潟」の見出しが目に入った。

すぐに干潟に足を運んだ森田さんは、ゴミに埋もれ、汚れきった干潟を見て「昔がなつかしくなるのと同時に干潟がすごくかわいそうになった」という。干潟を守る運動を始めていた「野鳥の会」「千葉の干潟を守る会」に入会、観察会などに参加し始めた。

見事に息吹き返す

だが、「正直、ちっともおもしろくなかったし、何か違っているように思った」ことから「干潟の立場になって、干潟がしてほしいことは何かを考えた」うえで、とにかく干潟に散ったゴミを取り除こうと決意、たった一人で泥に挑み始めた。

軍手とビニール袋でゴミを拾い始めたが、ガラスや鉄クズですぐに破れる。ゴムひきの軍手や土のう用の麻袋を買った。ゴミを運ぶ一輪車、ロープも買った。石やガラス、ビニールなどを拾い上げると「頭のシンを突き上げる悪臭に思わず息を止めていた」という。

しかし、ゴミを取り除けば数週間でゴカイやカニの住む穴が現れる。悪臭が消えてゆく。確かに干潟は生きている。人間が少し手を貸してあげれば、干潟は息を吹き返してゆくことが実感された。

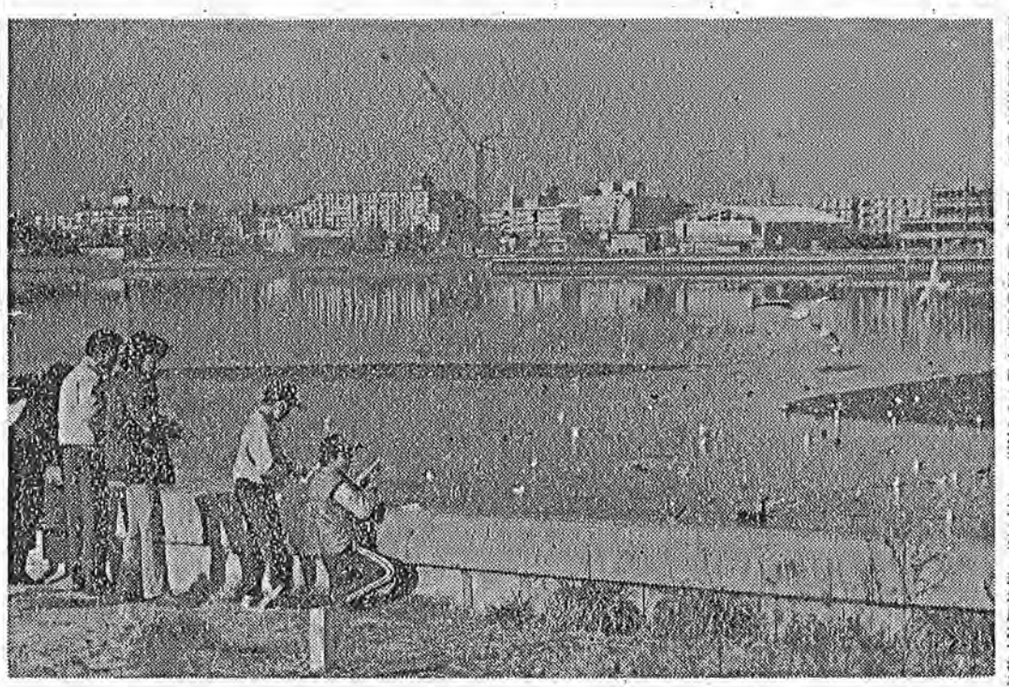
五十二年、環境庁が干潟を「鳥獣保護区」とする方針を打ち出す。五十四年、森田さんらとの話し合いで県企業庁がゴミの収集、干潟周辺緑地の保全などに協力を約束。五十五年、地域住民も参加して谷津干潟クリーン作戦が始まる。同年、海岸道路建設工事中の大手建設会社作業員らから、大型ゴミ搬出の協力申し入れ、それ以来週一回二年半にわたって重機を使った粗大ゴミの回収が行われる…。

水上公園化が進む

干潟はみちがえるほどきれいになった。そして五十九年十一月、公害防止事業団が干潟を含む一帯を「多目的親水緑地」として整備、干潟は国設鳥獣保護区として水上公園にする計画がまとめられ、現在、関係省庁の調整が進んでいる。

「干潟は病人です。臨床的に本来の干潟の機能を高めるよう、人間が手を入れてゆかなければ」。森田さんは、これからも干潟の〝番人〟に徹してゆくだろう。

野鳥が舞い、カニが生息する谷津干潟。東京湾岸のオアシスとして多くの人に親しまれているが、この保全には森田さんらの泥まみれの苦闘があった＝習志野市谷津三丁目で



1月10日
サンケイ新聞

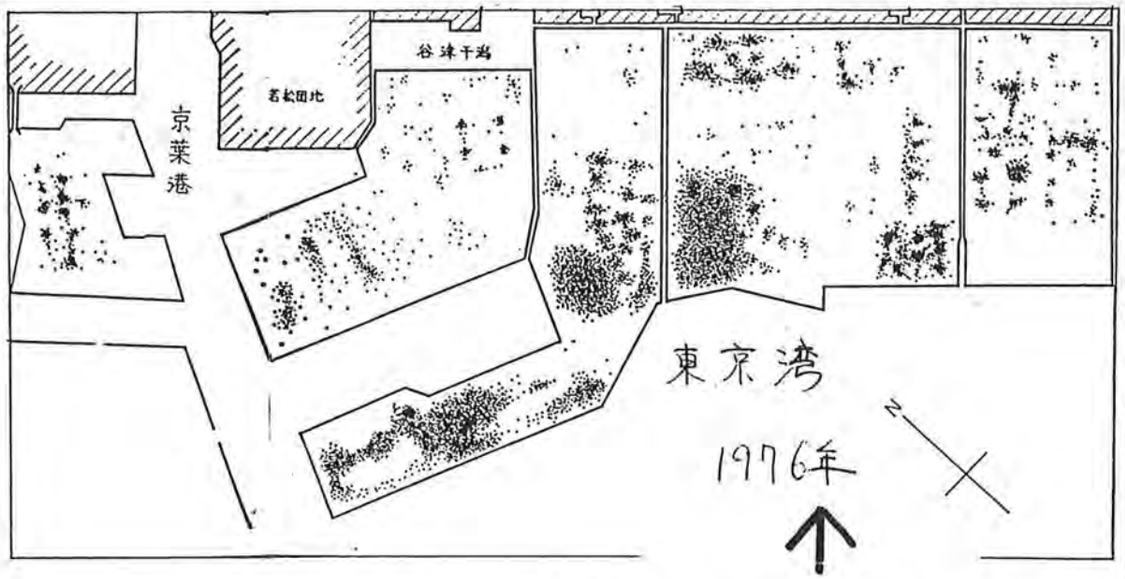
1985年度 コアジサシ・シロチドリ・コチドリ繁殖調査報告

ふかんど
第358号
1986.2.4

谷津干潟愛護研究会
〒275 習志野市谷津三―二五―一一
電話〇四七四―五一―五〇四四
文責 森田三郎

会費 年2000
創立 1974.12.9

事務局 0474・51・7076 中村容子



この調査は、昭和50年から毎年調査している。埋め立て地の、貝ガラと砂の、草が全くないか、又は少ししかない砂漠のような所に巣を作る。

三種とも、脚で地面にくぼ地を掘り、多少の差こそあれ、貝ガラを敷いて卵を産む。コアジサシとシロチドリは三つ。コチドリは四つ。草は全く使わず、文字通りムキ出しである。砂嵐や強風、大雨でもずぶぬれになって抱いている。

本能の知恵か、身を隠す所が無いので、産まれてから歩き出すのが早い。

特に、シロチドリとコチドリは早く、産まれてから2〜3時間で、もう早いスピードでかけまわり。人や犬が来ると、ピタリと地面に伏す。親からエサは全くもらわない。踏まれても、声すら立てない。

夕暮の、広大な埋め立て地の荒涼たる中。"ピロピロー、ピロピロー"と鳴きわたるその声は、やがて全滅する己がコロニーの運命の、哀れで悲しい訴えか―――。

昭和60年の、彼らの営巣と調査はあっけない幕切れだった。最盛期に来た台風の為、殆んど水とゴミで全滅してしまった。

1985年 幕張埋立地

コアジサシ	シロチドリ	コチドリ
27	32	2
76*	91*	8*
		計
		61
		175*

尚、京葉港・浦安・葛西はすでに全滅。

表 コアジサシ・シロチドリ・コチドリの巣卵数．1976年4月10日〜8月20日調査．表中の上段は巣の数を，下段は卵の数（*）印を示す。

種 / 埋立地	コアジサシ	シロチドリ	コチドリ	計
幕張・京葉港	2,291 5,384*	2,508 7,338*	77 233*	4,876 12,955*
浦安	214 578*	531 1,524*	19 71*	764 2,173*
葛西	1,247 3,275*	1,063 3,049*	67 238*	2,377 6,562*
計	3,752 9,237*	4,102 11,911*	163 542*	8,017 21,690*

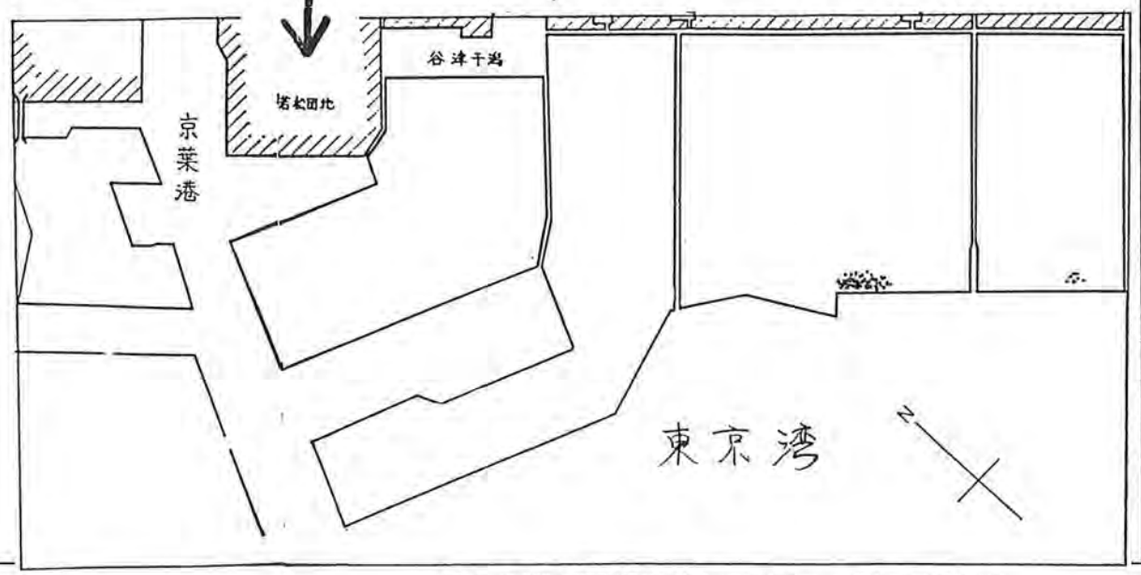


図2 京葉港・幕張地区におけるシロチドリ・コチドリ・コアジサシの営巣個所（1点が1巣を示す）

今年も4月下旬より調査します。消滅する前に是非見ておいて下さい。

おやっ、巣作りかな？ 〜 真冬のクリーン作戦 〜 獲物を捜して

チュウヒの季節です

1月25日の干潟の上空に、2羽のチュウヒが旋回しながら飛んでいました。ゆっくりと舞うように飛びながら、その鋭い目で獲物を捜しているのです。運が良ければ、急降下して、ネズミや小鳥をつかんでゆく姿が見られるでしょう。毎年冬には、この他トビやチョウゲンボ、コミミズクの猛禽類が観察できます。

主婦の力に支えられて

孚真は、1月24日(火)の主婦の為のクリーン作戦。才143回目のその。

今が、いちばん寒さが厳しい時。この日を、うすらどんよりと曇っていました。参加者は、松枝さん、宮川さん、本宮さん、森田の4人。ゴミは15袋と、一輪車2台分。

主婦がまわりのゴミを拾ってくれるので、男はその分、干潟の中のゴミを拾えるのですよ。

〝本物〟になりますように

ひょっとしたら、コッコとクロは、本当に巣を作るかと知れない。

実はこのところ、クチバシで枯れたヨシを拾ったり、立っているヨシをくわえては折ったりしているのです。アヒルは現に、私達が「ふかんど島」と名付けた孚真のヨシ野に、今度も又、12個程の卵を産んであるのです。

この先、皆んなで注意して見ていきましょう。

目には見えませんが・・・〜「ノリ」が発生しました

ふかんど

第359号

1986.2.14

谷津干潟愛護研究会
〒275 習志野市谷津三―二五―十一
電話〇四七四―51―五〇四四

文責 森田三郎

会費 年2000

創立 1974.12.9

事務局 0474・51・7076 中村容子

干潟の中央部でを

会員のみなさん、うれしいことに、谷津干潟にノリが発生しました。

そうです、あの食べる「ノリ」です。正真正銘のものです。

昨年の12月の末、まだほんの小さなものを見つけました。そしてその後、ずうーっと様子を見続けていたのです。

今はだいぶ生長して大きくなり、長さ10cmぐらいのものもあり、ぶらりとたれ下っています。

ノリは、杭や石、ヒモや流れて来た枯れ枝、アミ状の袋などに着いて育っています。

そこは、去年の夏以来、ビニールやシート類、石や埋もれた流木、カン、ビン、特にびっしりといろんなものに束になる程からみついた、大量の釣り糸などを拾ってきた所です。更に、今月の11日には、干潟の中央部でと、木の枝に発生しているのを見つけました。

どうですか、みなさん。来年は干潟に、「ノリ筏」でを立てましょうか!?

寒風をついて 潟スキーは滑る

今年の冬は、ひときわ風が冷たく感じられます。

会員のみなさんによるクリーン作戦、大変有難く思っております。おかげで、男子は干潟の中のゴミを拾うのに、いや、つかんで引っぱり出したり、掘り出したりするのに、かなりの精力と時間をつぎ込めるようになりました。

目につくゴミは、拾えばすぐわかり、人は、「きれいになったなぁ」と言います。でも、本当は、その何倍ものゴミが、目には見えませんが、干潟の中に埋もれ、隠されているのですよ――。

それらのゴミは、水にぬれ、砂やドロがたくさん着いていて、とても重いのです。干潟のまわりや、上の乾いたものよりも、同じひと袋拾うのに、少なくとも10倍以上の労力と時間がかかります。

それだけでなく、そうメチャクチャに汚れるので、その用意と後始末、洗濯などが面倒くさいのなんのって!

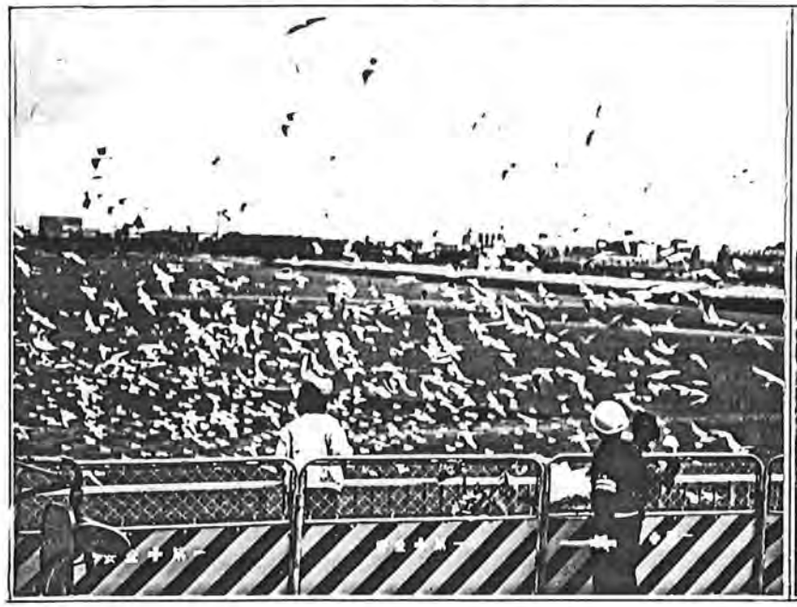
この寒空。オケツを丸出しにして、パンツからみんな、「エイッヤッ」と着替えてます。

潟スキーによるクリーン作戦は、旧遊園前面にて、泥まみれで展開してます。

結果がわかるのは、まぁ、春になってからでしょう。

ノリを見たい方は、森田が案内します。

ある大風の日に　〜干潟の学校児童たち〜　またまたアヒルの卵



何とかしてやりたいが

「ーーーあぁあ、また巣を作って卵を産んじゃった。しょうがねぇなぁ、かわいそうな気がしちゃうよぉ」。私たち、そんな気持なんです。

「ふかんど島」のヨシ野の中に、今を営巣している。市の緑地課の人が、まわりに散らばっている卵を、帽子の中にいっぱい拾いました。

干潟をかわりがってね・・・

このところ干潟には、近くの学校から児童たちが観察に来るようになりました。学級単位や学年単位でがやくと。それとかクラブや三々五々のグループがノートとペンを持って。でと、まだ、かわいそうなことに、彼らを受け入れる施設というか、態勢が出来てないのです。「ごめんね君たち、もうしばらく我慢してねーーー」。

避難の為に来たのでしょう

その水は、昨年の12月のある日のことでした。その日はとっても風の強い日で、干潟の水面には波が白くなって立っていた。

いつものように、パンのミミを投げに干潟に行ったら、ものすごい数のユリカモメの大群が目に入ったのです。パンを食べに来る時のやかましさで、話しが聞えないのです。

きっと、東京湾から飛んで来たのでしょう。波や風の少ない谷津干潟は、きっと、鳥にとって集まりやすいのでしょう。

ふかんど

第360号

1986.2.19

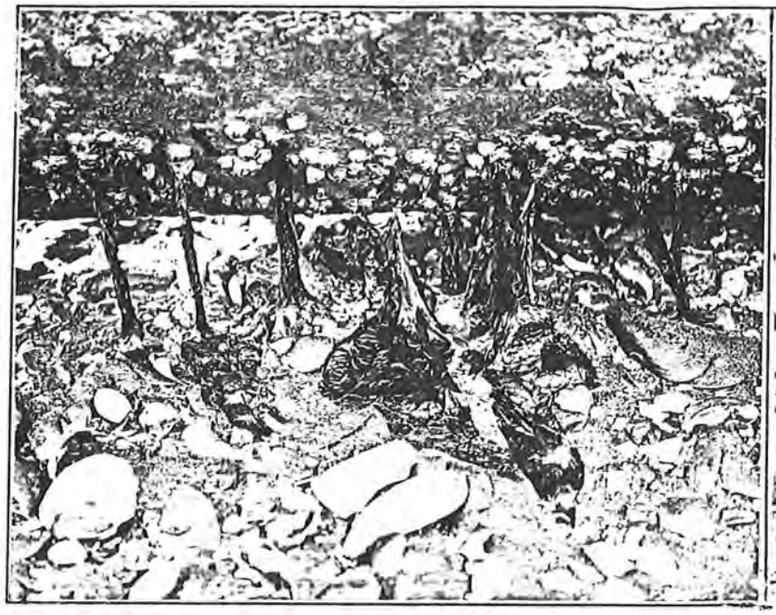
谷津干潟愛護研究会
〒275 習志野市谷津三―二五―十一
電話〇四七四―51―五〇四四
文責 森田三郎

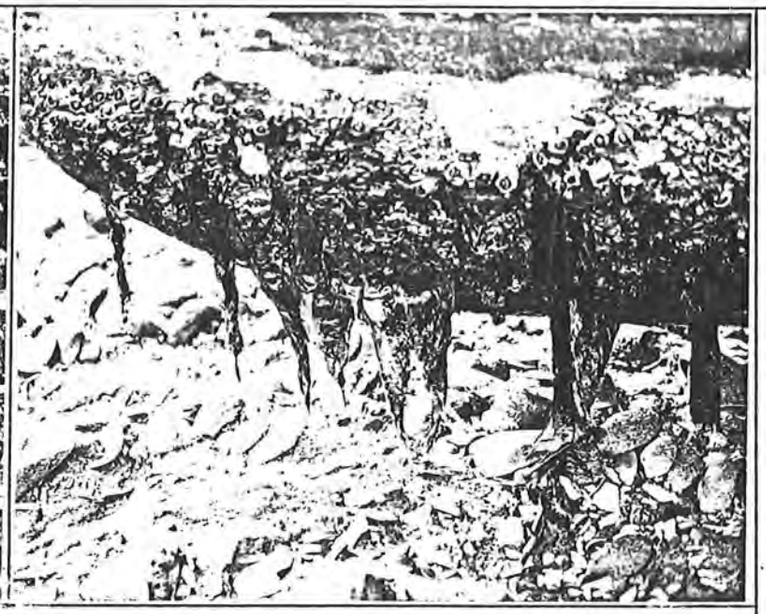
会費年2000

創立 1974.12.9

事務局0474・51・7076 中村容子

ノリがすくすく育っています！（2/13）

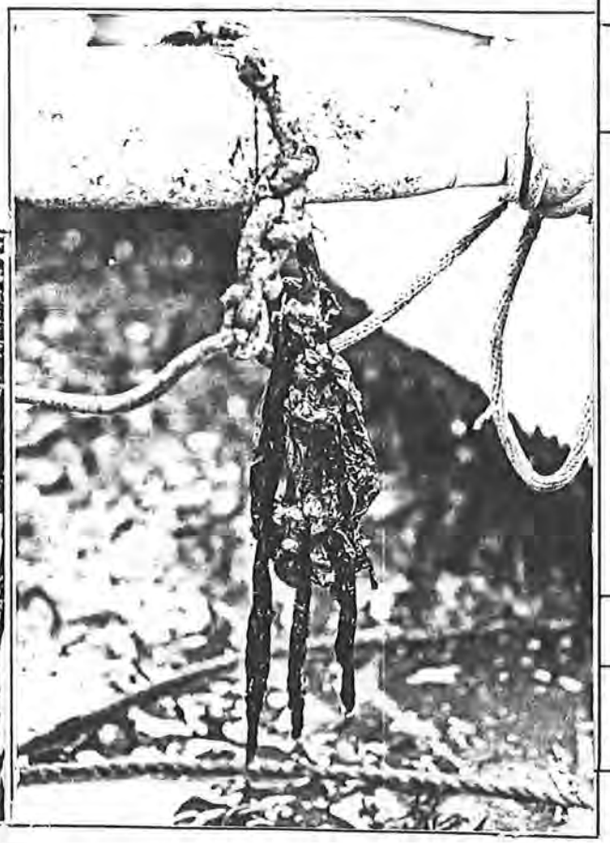




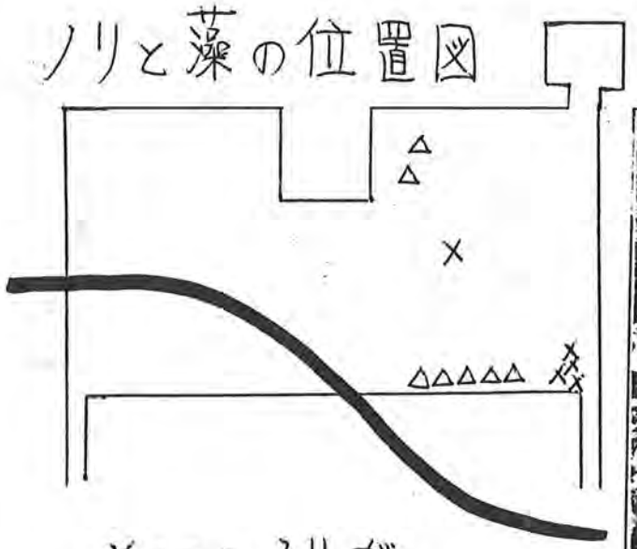
↑ボートの底には、ごらんのようにノリがいっぱい。長いのは20cm以上のものも。

ボートをつないである、ヒモやロープにも生えている。↓

アサリを入れるアミ状の袋にも、いち面にびっしりと張りついています。↓



ノリと藻の位置図



×---ノリが生育している所

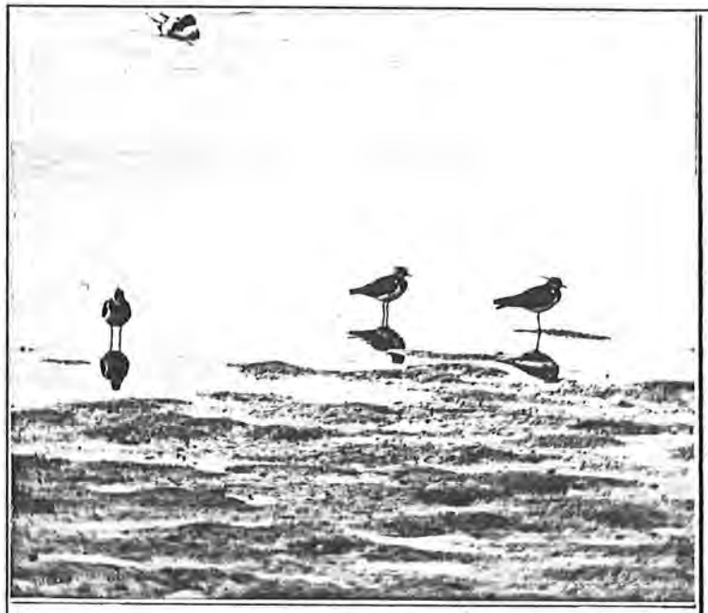
△---藻が発生した所

どうです皆さん、その見事に生えているでしょう。谷津干潟にノリが出来るなんて、ウソみたいに思ってるんでしょう。

クリーン作戦を推進する私達にとって、こういうその程、大きな力、励ましそして慰めはありません。干潟をふさいでいるゴミを、更に清掃して参ります。

「手足はかじかむと、心は燃ゆる・・・」

タゲリが、大挙飛来 ／ コハクチョウが飛来 ／ 子供達よ有難う！



本来、塩水には来ないんだが

会員の五十嵐吉夫氏の調べで、17羽をいることが確認されました。

タゲリは、通説では、内陸性の鳥で、田んぼや湿地に生息するとされています。8年前に1羽。去年は9羽。そして今年はなんと、17羽と。更に、ゴカイやカニを食べている！

2月15日(土)午後3時。旧遊園の前面を、潟スキーでクリーン作戦をしている時に見つけました。

1羽です。谷津干潟にハクチョウが来たのはこれで3回目です。

干潟から上って400mで一応字しておきましたが、30分後、別の所へ飛んでいってしまった。

手が荒れますよ

特に、指先は固くガサくになる。干潟の中の、重いゴミを堀り出したり、指先に力を入れるのでそれが原因であろう。

風呂に入った時、熱い湯の中でよくもんでいる。もみながら、昼の、旧遊園の前面干潟を想い浮かべているのである。今まで全く手つかずだった所が、昨年の夏より清掃し始め、ゆっくり変っていくのを。

子供達の働きかけで

私達のクリーン作戦のことを知った子供が、地域の人に相談、働きかけをしてくれたお陰です。

そして、その子供達は今、みんなでこの船の名前を募集したりして、考えているとのことです。私達は「ふかんど号」と考えています。会員の皆さんを、何か良い名前があったら是非どうぞ。